

パネルディスカッション

どうすれば「持続可能な社会の創り手」を育成できるのか

[コメンテーター]	荒瀬 克己（独立行政法人教職員支援機構 理事長）
[コメンテーター]	溝上 慎一（学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授）
[事例報告者]	伊藤 恵哉（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）
[事例報告者]	滝本 順之（京都市教育委員会 学校指導課 指導主事）
[事例報告者]	酒井 淳平（立命館宇治中学校・高等学校 教諭）
[コーディネーター]	杉岡 秀紀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室コーディネーター／福知山公立大学 地域経営学部 准教授）

杉岡 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、福知山公立大学の杉岡でございます。2017年度からだだったと思いますが、高大連携推進室のお手伝いをさせていただいており、今年は6年目になるのではないかと思います。よろしく願いいたします。

先ほど、荒瀬先生、溝上先生から、日本の今後の高大連携・接続について大きな、そして、あるべき方向性を示していただきました。それを受けまして、今度は、京都でご活躍の高校のお三方から、高大連携の取り組みを皆さまと共有したいと思っております。

報告に先立ちまして、簡単に私の自己紹介だけしておきます。高校との絡みでいいますと、京都府教育委員会のWWL、ワールド・ワイド・ラーニングの略でございますが、こちらのお手伝いをしたり、また、京都府教育委員会の府立高校の在り方ビジョンづくりであったり、それから現場では、京都府立福知山高校や京都府立宮津天橋高校の学校運営協議会や探究の伴走をしております。京都市内では、京都府立鳥羽高校のSGHの取り組みも初期段階からお手伝いしております。その他、単発でいろいろな高校の探究活動の支援をする中で、本日、溝上

先生、そして荒瀬先生がおっしゃった、現場の問題意識を大学教員として感じております。

少しだけ京都府北部のご紹介です。本日はここ、京都市内で開催しておりますが、このような高大連携は、地方でも必要だと思っております。今、私どもの大学がある福知山でも呼びかけまして、北近畿高大公連携フォーラムというものをつくりました。今年は、鈴木寛元文部科学副大臣をお呼びし、地元と国や世界の動向を含めた高大連携の勉強会をしたり、去年、このフォーラムにご登壇いただきました、宮津天橋高校の多々納智先生をお招きしたり、あるいは、これは3年前なのですが、荒瀬先生にも福知山にお越しいただき、勉強会をしたり、という活動を展開しております。このように、京都市内だけでなく、京都市内でつながったネットワークやエッセンスを京都府北部や兵庫県北部に広げていこうという取り組みを日々しております。

さて、今日のテーマなのですが「どうすれば『持続可能な社会の創り手』を育成できるのか」という題を設定させていただきました。これは、先ほど、荒瀬先生からご説明いただきましたテーマに「どうすれば」を付けただけなのですが、

それを議論してまいりたいと思っております。荒瀬先生が I have a dream のお話の下りで、このようなことをおっしゃっていました。「高校は初等中等教育段階最後の教育機関として、高等教育機関や実社会との接続機能を果たしている？」と。このような状態を 2020 年度代でつくるために、京都ではその取り組みがどこまで進んでいて、今、どのようなことを行っているのか、あるいは今後行おうとしているのか。そして、その中での課題は何なのかということ、まず、お三方からご報告いただきたいと思っております。

事例報告者は、まずは京都府教育委員会指導主事の伊藤先生です。そして、続きまして、京都市教育委員会指導主事の滝本先生。そして、府、市ときまして、今度は私立の立命館宇治中学校・高等学校の酒井先生。この順番で 15 分間ずつ、それぞれの事例を皆さまにお聞きいただきまして、その後、溝上先生と荒瀬先生にもご登壇いただき、5 名でパネルディスカッションを進めてまいりたいと思っております。

では、伊藤先生、早速、よろしくお願ひ申し上げます。

伊藤 (スライド 1) 皆さん、こんにちは、失礼いたします。京都府教育委員会の伊藤と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。早速ですが、われわれ京都府教育委員会が取り組んでおります「WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業」の中から、高大連携・接続についてご紹介させていただきます。タイトルのとおり、令和 2 年度から指定を受けておまして「Society 5.0 の未来社会で活躍できる人材育成」に取り組んでおります。

(スライド 2) 「WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム」は、あまりなじみのないお話かと思しますので、文部科学省の実施要項から一部、抜粋してまいりました。赤

字の文字をご覧ください。「世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するため」「高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し」「高校生へ高度な学びを提供する仕組み (アドバンスト・ラーニング・ネットワーク) を形成する取り組み」です。今、全国に拠点校がたくさんあります。本日、お越しいただいています立命館宇治高校も拠点校の 1 つですが、文部科学省の構想では、最終的にその拠点をつなぎまして、ワールド・ワイド・ラーニングコンソーシアム、世界規模の学習共同体を構築する、それを支援する取り組みがこの WWL 事業でございます。



(スライド 3) 京都府教育委員会の構想は、このように非常に細かくありますが、ポイントとしましては、タイトル右下にあります。われわれは、WWL 事業でこちらの 6 つの資質・能力を育成したいと思っております。この 6 つの資質・能力を育成するために何をしているのか、その方法が「京都戦略」の 1、2、3 でございます。本日は、この中から 2 つご紹介させていただきます。真ん中にございますとおり、これはネットワーク事業であり、京都府教育委員会を中心とする管理機関としまして、カリキュラム拠点校は京都府立鳥羽高等学校、共同実施校が京都府立福知山高等学校で、他府県とも連携して取り組んでおります。

(スライド 4) 京都戦略を拡大しますと、このようになります。本日は、京都戦略 1 の「き

ようとAPP(アドバンスト・プレイズメントプログラム)」。これは、大学教育の先取り履修です。そして、京都戦略2の「府立高校共通履修科目『スマートAP』」、国内外の大学の先生方によるリレー講義をご紹介させていただきます。

(スライド5) まず「スマートAP」からです。

(スライド6) この趣旨ですが、先ほど、申しました6つの資質・能力のうち3つ、下に②、③、⑤とございますが「協働力」「科学的思考力」「課題解決の枠組みをデザインする力」、この3つの力の育成と関連しまして、大学の先生方と高度な学びを提供するプログラムを行っております。さらに、その先では、大学教育の初年次教育と効果的な接続に資するという趣旨でございます。

(スライド7) 目的でございます。さまざまなグローバルな社会問題の解決に必要な「リサーチスキル」、簡単に言いますと、探究のスキルを習得させることが1つのメインテーマです。それと共に「論理的・批判的思考力」「多文化協働力」、他者と協働する力の育成を目指しております。

具体的な内容ですが、これは高校2年生のみを対象としております。その高校2年生の希望者に対して、6名の大学の先生方によるリレー講義、ワークショップを主にオンラインで受講します。最終的に、その成果を生かして、京都府の国際会議であります「京都府WWL高校生サミット」に参加する。このプログラムが全て終わりますと、取り組みが十分である生徒に対しては、われわれが修了証を発行し、高等学校の単位として認めるという内容でございます。

(スライド8) 「カリキュラム開発から実施までの流れ」です。3年間、行ってまいりましたが、令和2年度に、制度設計をいたしました。鳥羽高校がスーパーグローバルハイスクールの指定を受けておりましたので、そこで取り組

みました総合的な探究の時間、イノベーション探究の成果を普及させる意味でも、鳥羽高校でお世話になっている先生方に講師を依頼いたしました。また、講師には、オーストラリアのクイーンズランド工科大学の先生も関係しておりますので、オンラインの実証研究も併せて行いました。令和3年度から開始いたしまして、対象校は2校、鳥羽高校と福知山高校のみですが、それぞれの学校に集まり、鳥羽高校、福知山高校、講師の三者をオンラインでつないだプログラムを開始いたしました。今年度は、対象校を6校に拡大いたしました。一人1台端末の利点を生かしまして、自宅から接続可能という方法です。27名が参加しております。

(スライド9) 参加校の位置です。京都府の地図をご覧くださいと、北は峰山高校から南は南陽高校まで、これらの学校をつなぎました。京都府教育委員会の実施するWWLの理念、目標としまして、時間的制約、距離的制約、地理的制約、そして経済的制約を超えて、在籍校の枠を超え協働できる学びのプログラムを提供したい。これを具現化した内容となっております。

(スライド10) 講師の先生方も非常にさまざまな地域からお越しいただいております、京都、大阪、オーストラリアです。第1回が「リサーチスキル」となります。問いの立て方や情報収集の仕方から始まりまして、リサーチスキルを先ほどのお言葉ですが「習得」する。それを踏まえて、第6回の「チームでプチ課題研究！—研究計画書を作ろう—」で、グループでの研究計画書作成に臨みます。活用します。最後に、京都府WWL高校生サミットで全ての学びを活用するという取り組みです。やはり、研究計画書は対面実施のほうがよいと思いましたが、残念ながら、行動制限のために2年間ともオンラインで実施しているという状況です。

(スライド11) 細かい話ですが、授業の構

成・時間です。第1回から第7回までは、大学の先生方による大学レベルのリサーチスキルに関する講義を90分2回、180分行っていただいています。その後、各回で生徒がレポートをつくったり、振り返りをしたりするのに30分です。京都府WWL高校生サミットは、終日行っていますので280分。計1,750分、高等学校の授業時間数35時間相当の1単位に相当しますので、取り組みが十分な生徒には1単位を認定しているということです。

(スライド12) このスマートAPの一番の特徴が、連携しているということです。第1回から第5回まではリサーチスキルの学びですが、それを活用するために第6回では研究計画書をグループでつくる。このグループも、在籍校をわざとばらばらにしています。その後、第7回でつくったものを発表して、プレゼンテーションの講義を受ける。最後は、高校生国際会議で全ての学びの成果を発表する。当初、対面の場合には、さらに細かい研究計画書をつくることを、乾先生と計画しておりましたが、コロナ禍のため、やはりオンラインとなり、かなり入念な打ち合わせを何度も繰り返しまして、かなりシンプルなもので研究計画書をつくることにいたしました。これが高校段階での学びの連動ですが、真の目標は「探究」という高校段階から「研究」という大学段階の橋渡しを目指しております。

これが、オンライン上での協働作業の様子です。本当に心配したのは、オンライン上でのグループ作業は、われわれ委員会も初めて体験するものでしたので、不安を解消するために、乾先生とも繰り返し議論しましたが、ふたを開けてみれば、例えば、iPadのメモ機能を活用したり、Wordを共有したりしながらできる。なかなか高校生の可能性はすごいものだと、ここで実感したのです。

(スライド13) ちなみに、サミットとは一体何かというと、これは令和2年度から行ってい

るのですが、府立高校以外にも他府県から参加者を募りまして「持続可能な未来社会」を大きなテーマとして、下にある3つのトピックから1つ選びまして、その選んだトピックごとに生徒をグループ分けします。そして、日本語または英語で議論するのですが、これは全てオンラインで行っております。一人1台端末で、オンラインでつないで議論します。おととしは100名規模、今年は70名規模で行いました。例えば「文化遺産の戦略的活用」はということかといいますと、ユネスコが提案しています、文化遺産をベースとした観光業についてというテーマで、その課題と解決策をそれぞれ調べて、議論させて、良いものを発表させるということをしております。

(スライド14) 今年度の参加者は、このとおりです。杉岡先生、スティーブン・ハーダー先生にご講評いただきながら、参加者はスマートAP以外にも府立高校生、秋田県立秋田南高校、山形の九里学園高校、沖縄県立那覇国際高校、そして今年は大変うれしいことに、オーストラリアの高校生6名もオンラインで参加してくれました。ただ英語の議論は難しいので、留学生である京都大学大学院生や京都外国語大学の学生に参加してもらっています。彼らの出身国や地域も非常に多岐にわたってしまっていて、香港、中国、ミャンマー、オーストラリア、カナダ、ブータンから来ています。非常に真の国際会議ができていないかと思っています。

(スライド15) 修了生の声です。これは昨年度ですが、三者に共通しているのは、大学というキャリアを見据えたコメントをしております。

(スライド16) ただ、今年度は少し変わっています。最終アンケートがまだなので途中経過のアンケートですが、この生徒の前提として学校では個人単位の探究学習に取り組んでいません。しかし、スマートAPはグループ学習ですので、そこで気付いたことが「班の人たちと共

有することでRQ (Research Question) を客観的に考えられて良かった」。また「根本からRQが変わったり、精度の高いRQができていくのが面白かった」という、この生徒の言葉を見ますと、自分の考えを俯瞰的に見られて、また客観的に分析できるようになっていると思っています。

なぜ、このようなことが起こっているのか、あくまでも推測ですが、在籍校が違う生徒が交わる、地域課題も異なる、学校の文化も異なる、価値観も異なる生徒が議論するわけなので、その中で多様な価値観に触れながら議論が産まれていく。もう一つ大事なことは、フィードバックをする講師が大学の先生方ということです。すなわち、客観的といっても抽象的概念ですので、それがなぜ客観的であるかないか、質の高いフィードバックを大学の先生から受けられる、それが1つの要因かと思っています。

(スライド17) プログラム全体の成果は、このとおりです。趣旨のとおり「大学の初年次教育との接続」、そして「探究学習の指導に生かす」、探究の「作法」を一通り学べるプログラムが開発できたのではないかと考えています。そして、グループワークを通して成果物にまとめて発表する、連携が図れた。いずれにしても、やはり、講師の先生方は高校の探究活動がどのようなものかを非常に熟知されています。そして、われわれ管理機関と幾度となく入念な打ち合わせをしていただきましたので、われわれとの共通理解が生まれている結果かと思っています。

(スライド18) 次にまいります。2つ目が、大学教育の先取り履修「きょうとアドバンスト・プレイズメントプログラム(A P P)」です。

(スライド19) これが文部科学省から出ました「令和3年度学校教育法施行規則の改正について」です。科目履修生として、高校段階で習得した大学の単位を、入学後はその当該大学の単位として認めるというものです。

(スライド20) この流れも踏みまして、この流れだけではないですが、目的としては高大接続を図るために、京都府立大学と福知山公立大学と委員会の三者で協働して、先取り履修に試行として取り組んでいます。

(スライド21) これが、主な概要です。1つ目、大学生と同じ授業を履修する機会を提供する。2つ目、今、受講方法は、オンデマンド形式のオンライン方法で進めています。令和4年度、5年度の2年間は試行期間です。4つ目、大学の単位ではなく、試行期間ですので、高校の単位として修了者には認めるという流れで動いております。

(スライド22) これまでの流れが3年間ありました。先行事例である、埼玉大学、広島大学、県立広島大学とオンラインで、面談をさせていただいて、課題等を伺いました。その際も、2大学の先生方にも同席していただきまして、三者で協働してこのプログラムをつくってまいりました。今年、令和4年度では、身分は聴講生ではありますが、鳥羽高校と福知山高校から参加者を募って、実施をしております。

(スライド23) 今年度のご提供いただいております開講科目ですが、京都府立大学からは後期3科目、教養科目1科目と専門科目です。福知山公立大学は、全て専門科目になりますが、5科目提供していただいております。

現時点では前期科目が終わった段階ですので、前期科目の状況を踏まえてお話をさせていただきます。

(スライド24) 受講状況です。6名全員が修了いたしました。これも事前に入念なオリエンテーションをしていただいた結果だと思えます。一方で、課題として、高校生が大学からのメールを確認する習慣がありませんので、連絡が滞ることがありましたし、実際問題として、残念ながら、まとめて受講する生徒もいました。

(スライド25) 生徒アンケートです。受講生全員が、科目の内容に満足している。また、内

容理解についても、6名中5名が、非常に、お
おむね理解できていた。この残り1名は、一部
だけ理解できなかったという結果でした。

受講して良かったことは、8項目用意した中
の5つだけをピックアップしていますが、キャ
リアのことを考えるのに役立つというのが多
いですが、注目に値するのは4番かと思います。
主体性です。

(スライド26) 4人が答えているのですが、
生徒の感想を見たときに、どのような主体性が
生まれたかということ、最も分かりやすいのが3
番目の生徒です。赤字のところですが、この生
徒は最終レポートを1,600字で書いて提出す
るという課題がありました。そのときに、自分
で図書館に本を借りに行き、さらに高校で作成
した、類似したレポートを見返しました。主体
性が生まれるとともに、高校の学びが大学へと
つながっていることが伺えるような感想です。

(スライド27) 一方で、課題はあります。や
はり、高校生ですので、ICTスキル。2つ目
が、高校と大学のスケジュール感の違いからく
る負担感。最後に、LMS等の授業支援システ
ムに不慣れな点等があります。

(スライド28) 大学の先生方のご意見です。
大学生との能力差、レポートの出来に遜色ない
そうです。熱意も非常に良くて、刺激になった
とのご意見を頂いています。一方で、やはり対
面実施の授業は録画する必要がありますので、
負担がある。最後に、これは厳しいご意見です
が「高校生を受け入れることへの大学側のメリ
ットを感じられない」というご意見も頂いてい
ます。

(スライド29) では、今後の方向性ですが、
協働大学にとってメリットのある先取り履修は
実現可能か。また、本格実施ができ、単位を認め
ていただけるか。長期的には他大学とも協働で
きるか。そして、大学間の単位交換制度は実現可
能か。このような内容がこれからのわれわれの
課題かと思っています。ぜひ、パネリストの先生

方も含めて、ご意見を頂ければ幸いです。

以上で、ご報告を終わらせていただきます。
ありがとうございました。

杉岡 伊藤先生、どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、京都市教育委員会の
滝本先生にご報告いただきます。どうぞよろし
くお願いいたします。

滝本 (スライド1) 失礼いたします。京都市
教育委員会学校指導課の滝本と申します。本日
は、これまでの市立高校の改革の軌跡を簡単に
振り返り、その後、次年度開校予定の2校、開
建高校、美術工芸高校、昨年度、開校いたしま
した京都奏和高校について、簡単ではございま
すが、紹介をさせていただきます。

(スライド2) 今から27年前「京都市立高
等学校21世紀構想委員会」からの第1次答申
が出されました。21世紀は個の時代である、多
様な価値観が尊重され、画一化からの脱却が一
層遂行するものと予想される。1995年の段階
でのこの予想は、当然のことだったかもしれま
せんが、ほぼ確実に的を射ていたことになると思
います。この文章より始まるこの「答申」を
経て、翌年の第2次答申において堀川高校の改
革が提言され、具体化に至ったことは周知のこ
とと思います。堀川高校はパイロット校ですの
で、ここから京都市立高校の改革がスタートし
てまいりました。

(スライド3) その後、21世紀に入っ
てすぐの2003年、西京商業高校の改変により、
西京高校にエンタープライジング科の設置があり、
その後も社会の変化を見通しながら各校の改
革を着実に進めてまいりました。

(スライド4) 今年度より、ついに高校で新
学習指導要領が始まりました。平成30年ごろ
から、この図を見ながら、現場の先生方と準備
のやりとりをしてまいりました。非常に楽しみ

なときでもあったと思っているのですが、令和の世になって、コロナ禍も加わって、急速な情報化、社会にさらに非常に大きな変化が起こってまいりました。既に午前中に荒瀬先生がお話をしておられましたが「個別最適な学び」と「協働的な学び」という学習指導要領の趣旨を、よりよい実現に向けて、どういった学び方をしていくべきかが示されたことも、今後の学校改革を構想する上で非常に大きいと受け取っております。

(スライド5) この間、高等学校の在り方、存在意義が強く問い直されたと自覚しています。これだけデジタル化が進む社会において、感染の懸念も強く訴えられる中、学校に集まって学ぶことはどういう意味を持つのか、特色化、魅力化をより一層進めること、社会的役割を再定義・再認識すべきであること、京都市教育委員会としても重く受けとめて、準備を進めてまいりました。

(スライド6) 政令市には高校の設置義務がありません。存在意義を示す使命を強く自覚し、令和3年に市立高校全体のスクール・ミッションを再定義いたしました。それを前提とし、各校のスクール・ミッションを策定し、その具体である各校の3つのスクール・ポリシーを作成、皆さまにその姿を示すことができるよう、グランドデザインという形で表現をしていただきました。これらは、昨年度まで各校の先生方が努力をされ、完成されて、おおむね各校のホームページにアップされております。

(スライド7) こちらが、京都市立高校全体のスクール・ミッションになります。1000年の歴史を持つ都市を未来へつなぐこと、京都の魅力を生かして豊かな学びを行うこと、そして、これまでからの京都市の大きな役割であろうと自覚をすることで進めていくべき高校教育の先導、これを行っていくのだという決意でございます。

(スライド8) その全体のスクール・ミッシ

ョンを受けて、各校がスクール・ミッションを共に策定し、そして3つのポリシーをつくり、それをこのようにグランドデザインという形で表してくださいました。各校、特色ある、魅力ある教育を発進しようという努力の表れでございます。



(スライド9) こういった急速な社会の変化を見通して、昨年度は「京都奏和高校」、そして、次年度は「開建高校」「美術工芸高校」が開校いたします。午前中の荒瀬先生の記念講演で、今後、学校がどうあるべきかというメッセージを強く発信しておられました。本日、私から3校の紹介をさせていただくのは、まさに「市立高校各校の個性や専門性を生かした、多様なアプローチ」により、その目指すべき姿、目標の達成に向けて取り組んでいる様子だとご理解ください。

(スライド10) まずは、開建高校でございます。現在の塔南高校から移転して、新たな学校として立ち上がります。設置学科名は「ルミノバージョン科」。輝く光のルミナスとイノベーションを起こす、革新・改革のイノベーションを合わせた学科名でございます。先ほどの普通科改革における「地域社会に関する学びに重点的に取り組む学科」でございます。教育目標や指導方針は見ていただければと思いますが、まさに『自分らしく生きていくために必要な、自ら考え自ら学ぶ力』をつける学びを展開する。先ほどの午前中以来、ずっと話題になって

いるところの、まさに、普通科の学びを変えていくことで実現していきたいという挑戦的な学校でございます。

(スライド 11) 教育目標を実現するために、最も力を入れているところが授業であろうかと思えます。『新たな学びの形』の実践』ということで、学びの主体を生徒にシフトし「自ら考え、自ら学ぶ」。この学校では「協創」という言葉を使うのですが「他者とともに創る」。

(スライド 12) こういう姿勢を全授業で貫くということで「問いからはじまる学び」である必要が当然あるというようになっています。その「問い」をベースに、対話・協働することで、新たな価値観が作り出されたり、学びの楽しさを実感したり、また、成長のための目標が個別に設定されて、それに向けて一人一人が頑張る、それを教職員が支援するのが日常の姿になるように準備を進めておられます。

(スライド 13) この話だけが一人歩きすると、学校をつくっている先生方は大変残念がられるのですが、ホームルームが4教室分を1つにしたものになっております。「L-pod (エルポッド)」と呼んでいるのですが、そこに80名の生徒と複数人の担任で学校を運営していこうとしておられます。逆に、ホームルームが4つに分けられるので、このような学びのときにはこのような環境が望ましいという状況を、自由につくれる環境を学校が用意したことになります。

(スライド 14) やはり「総合的な探究の時間」も大きな軸で、3年間を通じて十分な時間を配置し、溝上先生の話にも少しありましたが、そもそも学びのマインドがあまり高まっていない生徒に、まずここから行くべきだろうと、スキルなどいろいろあるのですが、やはり、マインドを高めていくことで「未来の創り手となる志」や「成長のマインドセット」につながるという仮説の下に、まずは折れても立ち直るしなやかな心を育てる「学びのマインド」づくり

からスタートするのが、1つの大きな特徴になっています。そして、本物との出会いがあり、教科の学びへの興味・関心が高まり、自分でしてみたいという思いに至るのが、この総合的な探究の時間の大きな工夫になっています。

(スライド 15) 開建高校は、生徒が主役の学校づくりを具体的に進めようとしておられます。例えば、現在、新しい学校の校則などのルールづくりも生徒が話し合っているところと聞きますし、学校の校章も、大人たちからのアドバイスはもらってはいるものの、生徒の力で作り上げておりました。

(スライド 16) そのため、この学校のキャッチフレーズは「やってみたいをやってみる」。この言葉をどれほど実現できるかを、先生方が本当に試行錯誤しながら、現在、準備をしているところです。

いろいろ話すことはあるのですが、次にまいります。

(スライド 17) 続きまして、美術工芸高校になります。こちらは、今、私たちがおります、この建物から駅を挟んで鴨川の西側に、現在、建てられておまして、ある程度、できてきております。現在の銅駝美術工芸高校が移転して開校いたします。

(スライド 18) 教育理念と目標をお示しするのですが、見ていただきたいところは、この教育理念は、本日、午前中に何度も登場した令和、さらに言うならば今後の社会を生きていく生徒にとって必要な言葉がおおむね入ってきていることとなりますが、目指す学校像および美工(美術工芸高校)の教育活動の根幹をきちんとお伝えしておく必要がございます。「美で」というところがポイントで、美術「を」学ぶ学校から、美術「で」学ぶ学校への転換を図っております。

(スライド 19) 銅駝美術工芸高校で行っている8つの専攻は美工にも引き継がれます。生徒たちは、これまでも作品作りに並々ならぬ情

熱を傾けております。この専攻の学びをいま一度、見直し、日々の教科の学習と連関させ、作品制作に関わる技能のみならず、多様な力を伸ばすことで、先ほどの目標が達成できるのではないかという仮説を学校は立てております。

(スライド 20) その根幹として考えられているのが、やはり教科横断、「steAm」教育の推進です。あらゆる教育活動をARTでつなぐという方法で、生徒の「感じる心」「考える力」「表現する力」を高めて、最終的には生徒の想像力を最大限に伸ばす。これに向けて、現在、学校は教育課程を構築中です。

(スライド 21) 1つの例が示されていますが、現在、銅駝美術工芸高校内で先生方が「BIKO steAm」の実現が可能であろうという、授業の研究を進めておられます。スライドには、染織と理科のクロスが行われている様子を少し紹介させていただいております。ホームページにも、たくさん実践事例が挙がっております。

(スライド 22) 高大接続というよりは、少し違うかなと思うくらいのシームレス感があるのが、お隣に京都市立芸術大学が来ます。生徒たちは自然な流れで、大学生が学ぶ場と高校とを行き来します。この中で生まれるのは、ただの連携というよりも共に学び、共に伸びていく姿であろうかと思っていて、先ほど、高校側が大学側に与えられるメリットというものがありました。まさにそれも検討しながら、新たな連携の形を検討しておられます。

(スライド 23) 開建高校と同じく、社会との関わりは教育活動の充実には欠かせません。また、美術工芸という専門性を生かし、京都の伝統産業との連携も非常に重要なポイントですので、検討を進めておられます。

(スライド 24) 最後に、私もこの銅駝美術工芸高校の学校担当を何度かしておりましたが、最も気になる点の1つが、芸術系の専門高校は、高校でも作品制作へ情熱を傾け、大学入学後にもさらにそういう環境があり…という状況に

なりがちなのですが、そういった1本の道だけではなく、生徒が高校の多様な学びを振り返り、自身についてより深く知ること、高校卒業にとどまらない自分の未来を描く、予測不可能な社会を生きる力、未来を切り拓く力を、先ほどの「BIKO steAm」の教育推進と合わせて実行していく。このキャリアプロデュースという大きなカリキュラム・マネジメントの実施にも取り組んでおられます。以上が、美術工芸高校の紹介でございます。

(スライド 25) 最後は、京都奏和高校です。この学校の最大の特徴は、不登校経験がある、学びに困りやつまずきがある、人間関係の構築が難しい、もしくは、そのほか、学び直しをしたい生徒たちのための学校であるということです。そういった生徒たち、一度学校から離れた生徒たちをどのように育てていくか、この点を最も大切にしています。

(スライド 26) そのためには、一人一人が自分に適した学び方を見つけ、目標に向かって頑張っていけるような学習を始められるような支援。周囲の仲間との人間関係の構築に、もう一度、取り組んで、集団で学んでみたいという思いを高めてもらうための支援。そして、学校内にとどまらない、いろいろな人との出会いを魅力的なものと感じたり、よいものだと思ってもらえたりするような関係をつくっていくための支援や仕掛け。こういったことを大切にしながら、生徒たちが再び安心して学校に通い、自分に合った歩幅で学び、仲間と共に過ごしていくことができるような環境を有する学校づくりを目指しています。

(スライド 27) そして、高校生活を通じて、高校卒業後も自分らしく社会で歩いていけるよう、6つの力を育むことを目標としております。

(スライド 28) 幾つか具体的な仕掛けを、簡単に紹介いたします。多くの生徒が中学校までの学習につまずきを抱えていること。当然、そのつまずきの場所や理由も異なることから、生

徒一人一人が自身の学びのつまずきを見つけ、解消していくことができるよう、年度当初の数カ月を「ランアップ」の期間として、一人一人が学び直しに取り組みます。このランアップは、入学前の段階からプレ・ランアップのノートを生徒に配付し、今の学習状況や、京都奏和高校に入学してからの学習のスタートに、自分の学びがどれほどついていくことができるか、もしくは、ついていくために努力してきたかが分かるように、事前に生徒たちにどういったものが配付されております。

(スライド 29) また、集団で学ぶことをより良く進めていくためにもなる、学校独自の教科科目の開発も積極的に行っておられます。1年生の授業で「ビジテックⅠ・キャリアⅠ」を行っていて、仲間と共に学ぶ、仲間との関わりをどのように持つかという、本当に基礎的なスキルのトレーニングをしたり、実際に手を動かしたもののづくりをしたり、それを通じて仲間と対話をする、そういった時間を設定する。そして、そういった学びの延長として、他者と関わる機会もつくる「ビジテックⅡ(総合的な探究の時間)」を、現在、展開しておられます。下のほうに小さく写真がありますが、10月19日のニュースで少し紹介されたのですが、自作のおもちゃを、保育園の子どもたちに説明しながら渡す様が描かれました。

(スライド 30) 取り組みの最後になりますが「奏和タイム」という時間も設定しています。ポイントは、自分自身の興味関心を基に、多様な人とのつながりを体験し、幅広く人間関係形成について、実感できる、練習できる貴重な時間が設定されています。部活動から、みんなでヨガをしたり、一般的な教養になるようなもの、ゲーム的なものなどをいろいろな世代の人たちと一緒に取り組むことで、生徒が学校に来る魅力を感じる取り組みの1つとなっています。

(スライド 31) 特別活動においても、おそらく、中学時代によい思い出がない生徒たちがた

くさんいると思われる状況ですが、先生方が生徒たちの困りや特性に寄り添いながら、生徒同士が話し合い、少しずつ学年が増えていく、新しい学校行事が年々続いていく中で、作り上げていく努力を生徒たちが行い、生徒たちが共に過ごす教職員の方々と一緒になって、少しずつ集団で学ぶことを楽しんでいっているように思います。

今、映してありますが、昨日、放映されました、テレビの宣伝です。30分程度の番組なのですが、入学後、文化祭まで、どのように生徒たちが苦しみながらも、学びの良さや楽しさ、仲間と共に過ごすうれしさを体験する様子を、映像にまとめてくださっています。よろしければ、ご覧ください。

(スライド 32) 私が紹介しました3校は、まさに令和の新しい世の中で高校生たちにどのような力を付けるべきか、どうすればそのような力が付くのかを、各校なりに頭をひねり考えた結果の抜粋でございます。なお、3校だけではなく、そのほかの市立高校各校も自校の特色を生かした、持続可能な社会の担い手を育成する教育に取り組んでおります。各校、ホームページなどでも積極的に情報を発信しておりますので、ぜひとも見ていただき、さまざまご意見を頂戴できればと思っております。

以上で私の報告を終わります。ありがとうございました。

杉岡 滝本先生、どうもありがとうございました。堀川高校のキーワードも出てきまして、20周年にふさわしい場になっているなど改めて感じた次第です。

それでは、府立、市立とまいりまして、次は私学の取り組みということで、立命館宇治中学校・高校の酒井先生からご報告いただこうと思います。

酒井先生、どうぞよろしく願い申し上げます。

酒井 (スライド1) 皆さん、こんにちは、立命館宇治中学校・高校からまいりました、酒井と申します。よろしくお願ひします。お手元の資料ですが、主なスライドのみを抜粋してあります。幾つか資料のないものもあります。

(スライド2) まず初めに、2点だけお断りさせていただきたく思います。本校、立命館宇治高校はWWL第1期の拠点校として活動してまいりました。全国各地の高校と連携しながら、いろいろな取り組みをしております。ネットワークは今も続いているのですが、本日は一学校の地道な一カリキュラムに焦点を絞ってお話をさせていただきます。2点目が、1月20日、21日に、本校が研究会をすることになりました。もし、ご興味があれば、来ていただければと思います。

(スライド3) そして、私の自己紹介としていろいろ書いていますが、言いたかったことは1点のみです。略歴の右をご覧ください。私は京都市で育ちまして、市立に小中とお世話になりました。高校は京都府立にお世話になり、大学も京都で学んでいます。採用難の時代でして、拾ってくださったのが立命館でしたので、就職は私学です。つまり、もし、私がこの場で登壇する資格があるとすれば、市と府と私学と全てを経験していることくらいかと思って、この自己紹介を書かせていただきました。

(スライド4) さて、立命館宇治高校の探究ですが、先に結論から言いますと、なぜ探究をするのかについては、ほぼ、ここに尽きるかと思っています。生徒をサービスの受け手である「お客様」から、自ら価値を見出す「生産者」に育てる。私はキャリア教育を行ってきたので、キャリア教育でも非常に大事にしていたつもりではあるのですが、やはり、ここに尽きるかと思っています。

(スライド5) そして、私なりにですが、今日のテーマについては、実はここではないかと思っています。結局は、生徒がサービスを受け

る「お客様」ではなく、社会の創り手である、自ら価値を生み出す「生産者」に育てることができかどうか、今日のテーマの答えなのではないかと思っています。ただ、言うのは簡単なのですが、今の社会の風潮や、われわれがよかれと思って行っている指導が、結果的に生徒を依存させているのかもしれないし、なかなか難しいとは思っています。

(スライド6) さて、本校、立命館宇治高校ですが、1994年に学校法人立命館と合併をいたしました。その後、キャリア教育事業等も行わせてもらっていたのですが、2018年度から探究を核としたカリキュラムが始まっています。その議論の経緯ですが、この2017年1月のところをご覧ください。実は、次のカリキュラムを考えるカリキュラム委員会で、結局、ここが大事ななということで出た結果が、この探究だったのです。



(スライド7) 何かといいますと、そのときのカリキュラム委員会で生徒の状況を議論しました。よく言えば、非常に真面目で素直。しかし、今、非常に受け身な生徒が育っているのではないかと。そのような思いを委員のメンバー全員が思っていました。そのような生徒により多くを与えれば、より依存するのではないかと。今、必要なことはより多くを与えるのではなく、生徒が自ら動き出せるようなマインドやスキルではないかと。同時に、われわれ教員も多忙化の中で、横のつながりも薄くなって、コロ

ナでより大変になったのですが、それは置いておきまして、探究の指導を通し、教員が横につながって、われわれも指導力を上げていくことが、実は大事なのではないか。このような構想から生まれたのが探究です。おそらく、これを実現できるのは、当時、学習指導要領で言われていた「総合的な探究の時間」ではないか。そのような仮説からカリキュラムをつくりました。

(スライド8) 教員アンケートもしたのですが、全教員が思っていることは全く同じでしたので、安心してカリキュラムをスタートしました。

(スライド9～11) そして、カリキュラムですが、このように高等学校3年間で探究を6サイクルする形でカリキュラムを組みました。このカリキュラムに1点だけ本校らしい特徴があるとすれば、高3最後に山場があるところです。本校は大学を推薦で進学する生徒が多いです。もし私が、一般受験が多い高校にいれば、あと半年から1年、カリキュラムを前倒しするのですが、推薦が多いことを考えて、また高大接続を踏まえ、意図的に後ろ倒しにして高3最後まで行っています。

(スライド12、13) どのような授業かのみ、紹介させてください。高校1年生では「問いを立てる授業」を実施しています。問いを立てることなのですが、問いはコンテンツがないと立ちませんよね。本校は、そのコンテンツを教員が話をしています。実は、担任団で総合の授業を担当するのですが、各教員が自らの教科を学ぶ意味を生徒に語り、それに対して生徒が問いを立てるといって授業を行っています。教員は各クラスを回っていきますので、生徒はいろいろな教科の話の聞くことができるという仕組みになっています。

(スライド14) 高校2年生では、マイテーマの選定です。しかし、マイテーマとの出会いは確率であって、いつ出会うか分からないものな

ので、大事なものは数だろうということで、論文を書いたり、プロジェクトをしたり、進路探究をしたり、いろいろなことをしながら、どこかで自分のマイテーマに出会ってほしい。これを目標としてカリキュラムを組んでいます。

(スライド15) そして、高校3年生では、意図的に後ろ倒しにはしているのですが、大学以降の学び方を踏まえ、マイテーマを追究する、そしてそれをポスターで表す。さらに高等学校での自分の学びをストーリーにする。このようなことをしています。

(スライド16) このストーリーですが、細かいことはお手元の資料で見ただけであればと思います。

(スライド17) このように、生徒が高校生活グラフを書き、高校での成長、今後の課題を書いて、そして大学、そして将来というように自分の学びのストーリーを1枚に表すことをしています。

(スライド18) 次に、課題研究の例です。こちらは野球部の生徒が行ったテーマなのですが、正直、論文としては調べ学習プラスアルファ程度でしたが、この生徒は本当に野球がしたくて本校に入学して、レギュラーになれなかったのです。体が小さい生徒なのですが、なんとか自分でも140km 出ないかということテーマにして研究をし、スポーツ健康科学部に進学いたしました。今、大学で大変頑張っていると聞いています。

(スライド19) このように、結果的にビジネスコンテストで賞を頂いた生徒も出てきたのですが、いろいろな形で学びの集大成をつくっています。

(スライド20) 授業をした結果、生徒はどうか成長したのかについてもお伝えさせてください。本音としては、私は教員の変化のほうが大きな成果だと思っています。しかし、本日は生徒のほうに絞らせてください。

(スライド21) 探究の1期生が2018年度入

学です。皆さんもご記憶にあるかと思うのですが、大学入試が変わると言われた、あの学年です。つまり、あの学年ということは、まさに、高校3年生に上がるときにコロナが来た学年でした。私は、その当時、学年主任で、探究担当をしていましたので、思ったのです。高3になるときにコロナが来て、今まで探究やコアと言ってきたが、この休校期間に生徒が何もできなければ嘘だったのではないかと。われわれがどうしようもない、この休校期間に生徒がどうするかこそが、実はこれまでの学習の成果かもしれない。しかし、できなければ怖いなど思っていました。ただ、生徒はあの期間を使っているいろいろなことを頑張ってくれました。この後、幾つか成果をお伝えしますが、正直、私はここが一番うれしかったと思っています。

(スライド 22、23) 結果的に、将来の見通しのない生徒が減った。高3卒業時に将来の見通しがあるか・ないか、そして、あるとすれば行動すべきことを分かっているか・分かっているか。分かっているとすれば、行っているか・行っていないか。そこまでの4択で質問を取っているのですが、見通しがあって、行動すべきことが分かっている生徒が、手元にデータがあった2015、2016年平均と比べても15%以上、向上していました。

(スライド 24) また、河合塾の「学び未来PASS」という試験を、探究実施前の学年でも高1と高3で実施していました。高1段階ではほぼ同じ数字でしたので、結果的に比較ができました。

(スライド 25) このグラフのように、コンピテンシー、リテラシー共に探究学年から数値が向上したのは非常にうれしかったところです。

本当は、ここも私が大事にしたいと思っています。報告集には載せられない資料なのですが、立命館大学で大学入学生に対してアンケートをされているのです。お恥ずかしい話、高校での授業時間以外の学び時間は、本校の生

徒は立命館大学全体の平均と比べて劣っております。ただ、興味を持ったことを掘り下げたり、授業で実社会と学習内容の関連を考えたり、将来の見通しがあったりということは、立命館大学全体の平均よりも本校の生徒のほうがかなりよい数値を残してくれていました。高校としては、こういったことは非常に大事にしたいと思っています。

(スライド 26~28) そして、最後になります。われわれが生徒を見て、生徒から学んだ成果だけ紹介させてください。それは「探究がつなぐ学びのストーリー」という話です。Aさんという生徒がいました。この生徒は中学校から本校に入学したのですが、高1の現代社会でSDGsからアイデアを考えるという授業があり、彼女はマイクロプラスチックに興味があったそうなのです。このような形で、高1の段階で何かできるのではないかと、企業とコラボして何かをつくるということを言っていました。

(スライド 29) 2年後、彼女は高3になりました。高校3年生のテーマで、彼女はチームをつくって「うじらぼプロジェクト」と言い、企業とコラボして、オーガニックなマスクプレーをつくるというプロジェクトを行い、文化祭で販売しました。左が、企業の社長と面談している様子です。

正直に言いますと、急に「先生、社長が来ます。ちょっと面談に同席してもらえませんか」と、担当の教員と生徒から言われて、慌てて教頭に確認し、私が同席したのです。

(スライド 30) そのようなAさんですが、プロジェクトの報告書を見直すと、このようなことを書いていたのです。細かな字は報告書にするとして、彼女の書いた要点のみ報告させてください。彼女は「現代社会ではアイデアで終わった。探究があったことで具体的なアクションができた」と言っています。

(スライド 31) 一方で、各教科も大事なのです。Aさんいわく、自分でSDGsについて教

科等で学んでいたことがプロジェクトの力になったと言っています。そして、Aさんは経営学部に進学したのですが、経営を経験し、これは自分にとっては非常に大きな学びだったと言って、卒業してくれました。本校がようやく気付けたこととしては、総合的な探究の時間があるからこそ、学びをつなぎ、生徒の学びを豊かにできるのではないかとということです。

(スライド32) 本校はIBDP認定校なのですが、IBはカリキュラムに「コア」となるものがあるのです。「TOK」「CAS」「EE」というものです。

(スライド33) 私は、日本の学習カリキュラムでもコアはあると思っています。各教科に扇の扇面の部分があり、扇の要は総合・特活ではないかと考えています。おそらく、日本のこれまでの教育の蓄積からして、(IBのコアは専門ごとにプロがいるのですが)、日本はチームでつくるコアではないか。これが現在の私たちの仮説です。

(スライド34) これも、結局、われわれ教員次第かと思っています。お客さまから生産者へということをお初にお伝えしました。おそらく教員にも両方いるのではないかと、自戒を含めて思います。私も、両面を持っていると思います。しかし、自分が「教育の創り手」になれるとすれば、それは生産者であるときではないかと考えています。

以上が一学校の取り組み報告でした。ありがとうございました。

杉岡 酒井先生、どうもありがとうございました。

それでは、パネルディスカッションをしてまいります。まずは、パネルディスカッションの本題に入る前に、本日、前半でご登壇いただきました、荒瀬先生、溝上先生の順番で、先ほど、話題提供をしていただきました3つの事例報告につきましてコメントを頂くと

ころからスタートしてみたいと思います。

それでは、荒瀬先生、よろしくお願いいたします。



荒瀬 3人の先生方、ありがとうございました。京都の現在の姿が見えて、大変良かったと思っています。お話を承っておりまして、三者三様の語り口と内容とPowerPointの資料で、僭越ながら、この一体感のなさが、ある意味、京都の活力の元になっているのではないかと思います。次第であります。公立の2つ、京都府教育委員会と京都市教育委員会に、ぜひとも、また見せていただきたいと思っていますのは、私は中央教育審議会を代表しているわけではないのですが、中央教育審議会の議論としてたくさん出ますので、つまりいた生徒に対して、今後、どういった取り組みをしていく必要があるのか。私がかつておりました高校もそうですが、どちらかというと目立った生徒に対する対応は一生懸命行っていた面があるのですが、それでもつまり生徒がいるのです。あるいは、そういう学校に来ない生徒もいる。京都市は関わりがありますので、あえて申し上げますが、新しい高校をつくられて、そこは不登校の経験をしている生徒が来るということなのですが、不登校の経験をすると、そこにしか行けないというわけではないはずですよ。かつて私がおりました高校は、中学校の成績を一切見ないという選抜方法を採用すると、中学校どころか小学校の3年か4年から全く学校に行っていない生徒

が入学できました。やはり、どの生徒にも、将来の自分の意思を具体化するような、夢を叶えるような道が開かれているのが大事で、もちろん、そのようなところも考えていらっしゃると思うのですが、あえて単純な言い方をしますと、堀川高校に入学できるようにはならないのでしょうか。滝本先生は私がよく存じ上げている先生なので、あえてお尋ねしたいと思いました。

それから、立命館宇治高校のお話も非常に面白くて、溝上先生がなさったお話や私が少し申し上げた話にも関わっていると思ったのですが、酒井先生のお話の中で、私がとりわけ面白いと思ったのは、生徒の変化よりも教師の変化のほうが実は大きかったのだという点です。こういう取り組みは本当にそうなると思うのです。それがまた生徒の変化につながっていくと思うのですが、そういう意味で言うと、今後、この取り組みを続けて行かれて、どのような学校になっていくことが、期待する立命館宇治中学校・高等学校像であるのかを教えていただければうれしいと思いながら聞いておりました。必ずしも質問という意味ではなく、そう思いましたということです。また後で時間があれば、直接教えていただければと思います。

杉岡 荒瀬先生、どうもありがとうございました。せっかくの機会でございますので、これは一方通行だと面白くないので、一言ずつ順番にお答えというよりも、コメントに対するコメントを頂ければありがたいと思います。伊藤先生、いかがでしょうか。

伊藤 失礼します。私がお答えできるのは、公立高校でつまずいた生徒にどのような対応をするのかということでしょうか。京都府教育委員会でも京都府立清明高校や京都府立清新高校等、さまざまなニーズに応えられるように生徒を受け入れていますし、さまざまなフレックスな時間帯で勉強できる、修業年度も3年から

4年でも可能だということもあります。このつまずきというのは、おそらく、どの公立高校でも直面しているところだと思いますので、学習指導要領にあるように、適切な支援も行いながらいかないといけない。そのためには、教員の力量のアップも必要です。今、われわれが行っている事業というのはかなりとがったものですが、いかにとがったものから得られた成果を各校に普及させていくのかを考えながら、対応していきたいと思っています。まだ明確な答えはありませんが、これから検討していかなければならないことだと思っています。以上です。

杉岡 伊藤先生、どうもありがとうございました。

1点だけコメントです。現在、朝日新聞が行っている中退予防ネットワークのお手伝いをしているのですが、大学中退と高校中退は違うのです。特に、高校中退の場合は、中退してから違う高校に編入すると、なかなか数字に表れてこない。そして、高校の先生方は、大学に送り込んだ後はあまり関心を持っていただけない部分もあります。従いまして、この部分を誰がフォローするのが非常に難しいということを日々認識しております。ありがとうございました。

続きまして、滝本先生、いかがでしょうか。

滝本 ありがとうございます。まさに、今、言っていたいただいた2つにお答えさせていただこうと思っています。まず1つが、今、京都奏和高校自身が大変苦勞しているというか、必死になって取り組んでいることが、6つの目標の中にもあったのですが、高校卒業段階で付けるべき基礎的な力を付けるというものがあるのです。先ほど、申し上げたとおり、生徒たちの多くが、中学時代までの学びが、共通項というべき学力があったと思うのですが、その共通性にもそもそも課題があるパターンの生徒が非常に

多くなっている状態の中で、学校の授業を楽しく受けられるところから、レベル設定がまだ揺れているというか、難しい状況にあります。そういった意味で、中学段階からの学びを得て、ハードな検査というか試験がある場合は、受けるのが少し難しい部分もあるかもしれないと思いつつ、もう一つの答えとしまして、不登校であったり、個性的な学びや強い特性があったりするが、堀川高校に限らず、市立高校であれば西京高校もありますし、特徴的な学びと、一定の学力が要する生徒が、検査を突破して入学してきている部分があると思います。

現に、私も、前期選抜の試験の段階で、中学校までの評定を一切取り入れていなかった時期も覚えていますし、現在は少しだけ入っているのですが、突出した学力と申しますか、検査でのパフォーマンスがあれば、合格しているケースもあるかと思っています。今は、堀川高校、西京高校をはじめ、市立高校の多くが、そういった特性のある生徒をどのように支え、伸ばすかということに必死になって取り組んでいる状況も、もう一方でございます。そのため、選抜という1つの壁はあるものの、特性があったり、困りがあったりしながらも、堀川高校の探究を試みたいであったり、西京高校ならではの学びを楽しみたいという生徒がいれば、その高校に入った生徒を、特別支援というスタイルで学校が必死に支えながら、よいところを伸ばしていることもあるとお答えしておきます。答えになっていないかもしれませんが、2点でございました。

杉岡 滝本先生、どうもありがとうございました。それでは、酒井先生、いかがでしょうか。

酒井 あくまでも私見にはなってしまうのですが、生徒を見ていまして、高校の生活の中で、どのような人に出会って、どのような体験をしたのが、非常に大きく人生を左右すると感じ

ています。つまり、今後、立命館宇治高校が目指すべきものがあるとすれば、本当に多くの人と会え、協働できるチャンスがあるような学校だと思います。立命館大学が「挑戦をもっと自由に」というビジョンワードを掲げていますが、立命館宇治高校自身が、もともと宇治学園と立命館が合併したときから挑戦し続けている学校ですので、これは本校のDNAとも合うと個人的には思っています。

杉岡 荒瀬先生、一言お願いします。

荒瀬 皆さん、真摯にお答えいただきまして、ありがとうございました。中学校からつまづいている、ないしは小学校からつまづいて困っている生徒をどうするのかというのは、本当にいろいろとご苦労いただいていると思いますし、そのご努力については敬意を表します。ただ、私立高校というのは建学の精神があって、立命館の場合はグループがありますが、そこに単体として存在しているので、そこに入るか入らないかという話だと思うのですが、公立の場合はさまざまな学校を用意していて、どれも選択できる。結果的には入れないことはあるかもしれませんが、どれも選択できるところが、公立学校の持っている使命であるというように、私は思っています。

そういう意味でいうと、もし選抜の壁があるのであれば、その選抜の壁は取っ払うべきであるのではないかと考えています。これは、おそらく、今後、全国的にそういう動きが出てくると思います。そのため、いち早く京都から、選抜によって高校選択できない、もちろん、入れるか入れないかは定員がありますから、そこをどうするのかは、また考えないといけないのですが、ぜひ、そういったことも考えていただけたらうれしいと思いました。以上です。

杉岡 荒瀬先生、どうもありがとうございました。

た。選抜の壁を取っ払う。これだけでこのセッションを作れそうな、大きな問題提起を頂いたと思います。ありがとうございます。

それでは、続きまして、溝上先生から、京都の3事例につきましてコメントを頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

溝上 伊藤先生の取り組みと酒井先生のところから1つ、それから、滝本先生のところから2つ目と、このようにコメントをしたいと思います。取り組みはお三方とも素晴らしいので、皆さんにこういうコメントをして、勉強してほしいということでまとめています。私が伊藤先生の取り組みを聞いて、そのようなことかと思われるかもしれませんが、希望者にスマートAPを課した、手を挙げさせて参加させたところが、私は非常に大事な、意図的なポイントだと思っています。これを全生徒、全学年には行わないでほしいのです。伊藤先生も書かれていましたが、高大連携をするときに、より高度で、より先進的などというたい文句がありましたよね。SSHは分かりやすいですよ。私は、SSHを否定はしていないので、誤解しないで聞いてほしいのですが、高度な探究を全校に広げるのは、やり方を間違えると危うい考え方だとよく思います。したい生徒は、そういうところにより一層行きたい、大学の勉強も早く先取りして行いたい。そういう生徒たちには与えたいと思うのですが、高校生にはむしろ素朴な取り組みを、酒井先生がマイテーマと言いましたが、それを取り組ませてあげたいのです。

理由は簡単で、身近な生活世界から問いを基に探究するのは、おそらく、高校が最後です。大学に入って1～2年生で、最近ではプロジェクト学習をよく行いますので、そこにはそういうテーマもありますから、全くないとは言いません。しかし、大学人が、高校で言う探究をテーマ化して行うときにはどうしても「それは研究じゃない」「もっと、先行研究を調べろ」と

言って、論文を読ませ、非常に抽象度の高いところからテーマをつくらせるなど、よくさせています。そのため「どこの大学でも」「どこの先生でも」という言い方をしないのですが、大学に行くとそうなるのです。なぜなら、大学の先生はみんな研究者ですから、研究は身近な生活世界・経験世界から立ち上がらないことをよく知っているのです。

酒井先生から、高校生の野球の話がありましたよね。堀川高校のように全国でも探究で有名な学校が、生徒に初めにどういう探究をしたいかをアンケートに書かせたものを読ませてもらったことがあって、非常に素朴でした。先ほど、酒井先生が言ったような「なぜ、うちの野球チームは弱いのか」や「なぜ、俺はもてないのか」というテーマでは、おおよそ研究にはならないのです。しかし、知りたいことといって高校生が上げてくるテーマは、そういうものなのです。ここから、それでは問いにならないと言わないといけません。「君の関心をただ突き詰めるだけでは探究にならない。多くの人たちにとっての一般的課題にしていけないといけません」。そのため、探究としての問いへの上げ方は指導が必要だ。しかし、ぜひ、野球部がなぜ弱いかから、疑問を解決するような探究を行ってほしいのです。そうしなければ、論文や先行研究から、社会の成り立ちや環境問題など。環境問題も、大きなところからではなく、なぜ〇〇市は緑があまりないのかというようなところから始めてほしいわけです。そのように身近なところで問いを立てることは、高校が最後なのです。

そういう意味では、伊藤先生の話でいうと、希望者が最先端により一層向かっていくが、そこでやめてほしい。酒井先生のマイテーマは、さらに進めてほしい。私は、それでよいと思います。また、文部科学省でいうと、課題を設定し、情報収集するという、探究のプロセスがありますよね。そこは探究基礎として、しっかり

と教えてあげてほしいです。これは全ての高校生に大事なところですよ。

私は、今、桐蔭学園高校でも指導していて、探究を見せてくださいとよく言われることが多いですが、見ても普通ですよ。桐蔭学園高校で、全ての高校生に課している探究の授業は週1時間で、ほとんどが調べ学習です。アンケートを取ったり、実験を行ったりする生徒もいますが、みんな驚かれるくらい普通のものを2年間行います。しかし、探究の基礎をしっかりと教えることと、自分たちが必ず知りたいことや問いを徹底的に課題化することだけは強くしている。その上で、私たちはアフタースクールというプロジェクトを行っていて、週1時間行っているだけですが、さらに行いたい生徒は、放課後に大学やSDGsのフィールドワークで地域の人たちとつなげていく。ほとんどの発表は普通なのですが、その発表の中で1割くらいの生徒はコンクールやコンテストで賞を取ってきます。社会で発表しています。大学ともつなげてあげる。英語で発表したり、国際学会で発表したりしている生徒もいます。しかし、それは授業の中ではないです。授業の中は、素朴にいきたい。これが1つです。

私が京都にいるときに、最後に京都市立塔南高校にかなり関わっていたのですが、今日は、滝本先生から3つの新しい市立高校ができるというお話を伺って「すごいな、そうきたか」と。塔南高校に関わっていたときに、新しい取り組みをしていききたいとよく言っていたのです。堀川高校があって、西京高校があって、そして職業系では合併して京都工学院高校になりましたよね。先ほどの話で、改革があったと言っていました。銅駝美術工芸高校や堀川音楽高校があって、普通科の真ん中の塔南高校は、普通というよりも特色が弱い。特色が弱いのをどうしていききたいかという話だったのです。私は、それは全国の課題だと。つまり、職業系や専門科、それから上位の進学校はどの県でも、

どの地域でも分かりやすくきちんと整備している。しかし、普通科の真ん中くらいの学校は何も特色がない。ただ、偏差値的に上位校の少し下というだけ。生徒たちもそれだけで入ってくる。職業系や専門科のほうが教科学力は低いかもしれないが、非常に面白い。上位の進学校は、面白いかは分かりませんが、いろいろとやりがいがある。いくらなんでも失礼でしょうが、真ん中の人たちは、この程度のような感じ。これからの全国の高校改革の大きな課題の1つは、ミドル層の改革だ。ミドルのレベルをどのように捉えていくか。



これは、大学も同じです。偏差値が低いところが開き直って行っているし、上のほうはプライドと伝統で行っていますが、真ん中は集められればよい程度。それでよいのかということがずっとあります。日本がこれから徐々に縮小していく中で、これは、高校と大学で必ず解決しないといけない大きなテーマであり、ずっと塔南高校にも言ってきたのです。私は、今、それを桐蔭学園でも行っていますが、桐蔭学園の話は置いておいて、ぜひ京都奏和高校、開建高校、それから美術工芸高校が独自の特色をもって、栄えて、頑張ってもらいたいと願います。堀川高校、西京高校に続くことを目指さないでほしい。

ミドル層の問題とは、職業系や専門系でもそうですが、私はこういうことだと思っています。経験や活動に非常に長けていけば、彼らは伸びる力がある。しかし、抽象的な積み上げの概

念や体系的な情報操作には弱い。そのため、教科学力は弱い。弱くても真ん中くらいにはいるが、決して強くない。そのため、ユニークな経験的取り組みをどれほどたくさん頑張っても、堀川高校や西京高校には決して勝てない。勝てないから、3番手、4番手というようには理解しないでほしいという話です。では、例えば、何をすればよいかということです。この生徒たちが西京高校、堀川高校と決定的に違うところは、彼らにない取り組みや活動をさらにつくって行かせていくことです。その中で一生懸命に行って、いろいろと考える世界が膨らんで、それを言葉にして、伝えていって、ここでかなりの力が付いていくわけです。しかし、これを一生懸命しても、教科学力が弱いので、あまりよい大学には入れなく、3番手、4番手という話に落ちつくかもしれない。

しかし、発想を変えてみると、経験を一生懸命に行える生徒は、大学受験では2番手、3番手になるかもしれないが、社会では決して2番手、3番手にはならない。むしろ西京高校、堀川高校よりも活躍することがあるというトランジションを、ぜひ作り上げてほしいのです。そのために、今、私が行っている大学生プロジェクトの一例をお話すると、活動を一生懸命に行っても、それほど一生懸命に勉強しませんので、その活動自身が非常に大事というのがかなり重要な点です。桐蔭学園には、桐蔭横浜大学があるのですが、その偏差値は下位です。その中で、クラブ活動を一生懸命に行っている学生がいるのです。例えば、サッカーでは、Jリーグに多くの学生が入っていて、今年は11人がJリーガーになるのですが、その中で、名前は言いませんが、Jリーグのベスト3に入るチームに内定した、非常に上手な学生がいます。チームを引っ張っていくリーダー性も非常に高く、人格的にも他者に優しく、うまくて、強い学生です。チームの学生たちに、サッカーで頑張ると同じように、社会で生きていく力、

社会人基礎力を付けていこうというプロジェクトをしているのです。サッカーでたくさん問題解決をしているわけですから、それをサッカー以外のところで行っていかないと行って、そのためにアセスメントを行っているわけです。今日、皆さんに見てもらったようなアンケート調査もしています。アクティブ・ラーニングや主体的学習態度は、全国と比べてどれほどかも分かっている。意外と、大学の授業の中ではかなりきちんとしている。

河合塾に、高校版で「学びみらいPASS」もあるのですが、大学版で「PROGテスト」というものがあります。リテラシーとコンピテンシーという2つが大きくあって、リテラシーというのは、いってみると情報操作を中心に問題が与えられるもの。Aさん、Bさん、Cさんがいて、Aさんがこのように言っていて、Bさんがこのように言っているが、どちらが正しいでしょうかというような問題で、経験世界に合致してこないわけです。そこで扱われている情報は、国語の大学入学共通テストのような問題が並んでいるわけです。それを1時間ぐらいで解くが、解けない。

これは偏差値と相関が高く、その解答率は偏差値の上位校と、本学のような偏差値が下のところではきれいに相関の違いが出ます。そこで問題が解けないと、社会基礎力のうちの問題解決力や情報処理能力がレベル1から7のうちの2や3になるわけです。今、紹介したサッカーのJリーグに行く学生は、レベル2なのです。全国の平均が4くらいなので、社会人ビギナーとしては不十分という結果が返ってきて「君、サッカーが駄目になったら危ないよ」と言ったわけです。そうすると、彼は「それは、俺はばかだということですか」と言うのです。「ばかとは言っていないけれども、このテストで見たら、君は社会人にとって必要なレベル4に達してなくて、しかもレベル3ではなくてレベル2なので、全国の中でも下のほうだよ」とも

う少しサッカー以外のところに力を付けて卒業させたいという話をしていたのです。

ところが、コンピテンシーとあって、対課題や対人、対自己であるセルフコントロールは、レベル1からレベル7のうちレベル7なのです。つまり、全国トップなのです。仕事をしようという気や、あるいは課題に向かって忍耐強く取り組む力は非常にあります。しかし、情報処理操作が弱いばかりにリテラシーはレベル2なのです。この学生が、十分な力がないはずはないのです。なぜなら、ディフェンダーのポジションで、チームを引っ張っていく立場で、いろいろな意味で、人格的にも優れていて、よい学生なのです。本当に頭が悪ければ全日本に選ばれることはない。

違いは何かというと、経験値は非常に高いのですが、経験値から離れた抽象的な世界では操作が弱いのです。この間にあるものは何かというと、言葉の力です。サッカーの話を議論させれば、言葉が非常に豊かで、非常によいことをたくさん言う。しかし、サッカー以外のことになると、途端に子どものような話になる。言葉が、経験知の世界では豊かだが、自分が経験していない世界では非常に貧弱だ。そのため、ノートづくりをしてみる。分からない言葉や知らない漢字をスマートフォンで見えたり、いろいろな資料を見ていると、本当はたくさんあるし、授業の中でも多く出てくるが、みんなスルーしているのです。読めなくても気にしないし、書けなくても気にならない。それを全て気にして、書き出していけ。いろいろなところで出会った言葉を全て書き出していけ。サッカーのことで思ったことも書いていけ。サッカー以外のことも1日1個書け。その添削をしていく。そのような中で、言葉の世界が知識の世界になって、かなりの力が付くのではないかという、1つの仮説を持っているわけです。

実際に企業の仕事をいろいろと見ていてよく思うのですが、決して偏差値の高い人たちだ

けが活躍する世界ではないです。しかし、なぜ、私たちは偏差値の高いことだけを仕事の成功につなげて考えるのか。これが非常に不思議。おそらく、仕事によるのですが、銀行や商社、コンサルタントでは、かなり抽象度の高い、情報操作の世界で生きている仕事もあるので、一概には言えないが、多くの仕事は目の前の仕事がかかなり具体的なのです。その具体的などろできちんと情報処理操作ができれば、偏差値が低くても、リテラシーが弱くても仕事はできる。リテラシーテストはそういうところを扱っているが、仕事に役立つ、その人の情報処理能力を必ずしも扱っていないと私は思っていて、しかし、教科学力も同じです。

京都市の新しい取り組みで、これほど豊かな活動と経験を提供していくわけだから、そこからぜひ言葉の力を、活動においてはもちろんのこと、教科においてもつなげていってほしいです。まさにカリキュラム・マネジメントですね。将来、活動で頑張る人が、情報処理操作だけで強くて頭のよい、偏差値上位校の生徒たちに負けない学校をつくってほしいと期待しています。

日本が、ますます子どもが減って、人口が減って、いろいろと縮小していく中で、ミドル層の開発ができなければ、日本は終わっていくと私は思っています。これは大きな課題として皆さんと共有したくてお話ししました。

杉岡 溝上先生、ありがとうございます。

公開コンサルテーションを見せていただいたような時間でございました。滝本先生、一言、リプライを頂ければうれしく思います。

滝本 ありがとうございます。私自身は、開建高校の準備室ではありませんが、頂いたアドバイスは必ずお伝えしようと思っております。はっきり申し上げまして、堀川高校、西京高校に続けということではなく、やはり、社会で活躍、

自分自身が輝いていくために必要な力を付けることに特化した学校をつくっていく、塔南高校でのさまざまな取り組みから発展的に新しいところへ移動して特色化を目指しているということで、まさに溝上先生から言っていたような方向に向かって頑張っている。その上で、先ほど、言っていたような、言葉の力などの重要性は間違いなく必要だと思っておられると思いますので、必ず伝えて、教育活動の中に取り入れてもらえればよいと私も思っております。ありがとうございます。

杉岡 ありがとうございます。おそらく今日の会場にも、またオンラインの向こう側にも、京都市教育委員会や京都市立高校の先生方がいらっしゃると思います。

荒瀬先生、何か一言ございますか。

荒瀬 溝上先生のお話は、今日もまた非常に面白かったです。ありがとうございます。

本当の情報処理能力というのか言葉の力をどう付けていくのかは、おそらく、本当は全ての生徒に必要なのだが、どうも知識技能系で卓越した子どもたちは、そういうものがなくても、なんとなく生きていけるみたいに思っている。そこは揺さぶってあげたほうがよいと思いながら聞いていました。言葉の力というわけではないのですが、どうも、今、私たち大人も単純化してものを考える傾向があるように思います。悪いとばかりは言えませんが、割と明解な考え方や明解な答えを出す気がしています。残念ながら、これは教育の中にもかなりある。

先ほど、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会の皆さんには失礼なことを申し上げたのかもしれないと思いながら、私が申し上げたかったのは、これだけ歴史的にも三者三様であり、しかもそれらの流れが非常にしっかりとある地域というのは、おそらく、全国的にもそれほど多くないと

思うのです。京都市が京都府に言われてへなっとしているかということ、そのようなことはないし、京都府がへなっとしているかということ、そのようなことはないし、私学は私学で大変元気でいらっしゃる。お互いに元気で言い合える関係がある中で、旧態依然ということ失礼なのですが、選抜制度の壁の中で、どうしようもないと言っているのではなくて、京都からさらに発信できないかと思います。

ご承知のように7割の高校生は普通科の生徒です。国が普通科の改革のために、研究指定しますと募集をかけたのが、2つのタイプなのです。地域連携をする普通科のタイプと、もう一つは、学際的な研究をするような普通科のタイプの2つです。先ほどご紹介した、2020年11月の審議まとめの中で、あくまでも例であると明記し、説明のときも再三言ってきたのですが、文部科学省がこの2つの類型での研究指定を募集したのです。そうすると、結果的には、それほどたくさん出てこなかったのです。私は、その出てこなかった結果に対して大変安心をしまして、そのような決められた2つだけの類型で、どうですかと言われても出てこないのは当然で、出したところに問題があるというわけではもちろんないのですが、各県の教育委員会の見識がうかがえたのだと思っています。

よって、普通科の新しい形をするのであれば、先ほど、溝上先生が縷々おっしゃった、言語能力や、あるいは情報活用能力といったことをしっかりと行っていくようなスクール・ポリシーを立てて、そのような学校をつくるぞということを、京都であれば、お互いに非常に建設的な意見交換ができて、結果的には京都の高校生にとって非常によいことになることを願っています。

そうやってきたときには、この間から高等学校教育の在り方ワーキンググループでも議論が出ていますし、あるいは通信制高校の会議など、いろいろな場面で話が出るのですが、京都

に住んでいる人しか京都府の公立高校に入れませんかと言っていることについても、全国的に見ると、それこそ島根県立隠岐島前高校の島留学を含めて、あちらこちらで生徒に学びの機会を提供するのと、来てもらえばそこにいる生徒の刺激になるので、行っていけばどうかと思います。既にこのようなことを行っている高校が幾つもあって、実は京都も行っているのです。京都市立堀川音楽高校の例もあります。いろいろな学校で全国展開するような学校をつくってもよいと思うのです。

今後、高等学校の在り方を考えていくときに、都道府県の境がなくなる可能性だってあります。京都府北部地域の学校は、杉岡先生は非常によく知っていらっしゃる話で、以前に呼んでいただいて伺ったときも、福知山で会議を行っていたが、兵庫県の先生がたくさん来ていらっしゃいましたよね。都道府県の境でもって、ものを考えるのではなく、日本国内でもって教育をどう考えるのかを展開していく必要がある。繰り返しになりますが、そうなってくると、先ほど、溝上先生がおっしゃったように、情報処理能力や言葉の力といった資質・能力ベースをもってカリキュラム・ポリシーを書ける学校が出てくるのが、今後、本当に大事ではないかと思いました。ぜひ、それを京都から行ってもらえるとうれしいと、大きな期待でエールを送りたいと思います。



杉岡 荒瀬先生、どうもありがとうございます。

今日も、兵庫県からお越しいただいている先生もおられます。私が、今、住んでおります京都府北部地域では、よい意味で境界線があいまいになりつつあると思っています。われわれは、よく豊岡市や丹波市、丹波篠山市、朝来市などにも入っていくのですが、行政はなかなかこの境界を超えられません。しかし、大学だとすつと入っていけるのです。そういったことから、今、荒瀬先生がおっしゃったように、制度だけではなくて、文化、あるいは風土をつくることですね。これを行っていかねばいけない。それから、北部で言いますと、京都府立海洋高校という高校が宮津にありますが、ここでは宮津出身の生徒はとても少ないのです。本当に全国から海洋学を学びに来る。このように差別化することに、さらに応援してあげるといいですか、それでよいということを引きちんと社会が言ってあげることが大事だと思いました。

言葉の力という意味で、今、Kindle で読んでいるのですが、ジャーナリストの方が『教養としての上級語彙』という本を出されました。これは何かというと、著書の宮崎哲弥さんが自分で書きためてきた語彙の意味を徹底的に紹介した本です。言葉は積み重ねが大事で、溝上先生の言葉で言えば、普通科の高校だけではなく、スポーツや音楽、芸術など、いろいろなところで必要だという話が、今日の新たな発見、かつ気づきになったのではないかと思います。

さて、少し話を戻します。溝上先生と荒瀬先生の記念講演でのお言葉の中から、今日のパネルディスカッションで何を取り上げようかとメモをしておりましたが、多過ぎて、收拾がつかなくなりました。本日のこの時間だけではとても紹介できません。来年度以降の本フォーラムの素材とさせていただければと思いますが、1点だけ議論してみたいことは、本日のパネルディスカッションのテーマは「どうすれば『持続可能社会の創り手』を育成できるか」というお題であります。この1点だけ、ぜひ、5名の

先生方でディスカッションをしてみたいと思います。とはいえ、テーマが大きいので、私のほうで因数分解といいますか、絞りたいと思います。京都府内での実践、そして、荒瀬先生から解説していただきました「令和の日本型学校教育」の実現。これについては、2020年代ですので、あと8年、まもなく7年になるのでしょうか。こういった中で「探究」という言葉が5名の先生方の共通のキーワードだったと感じました。その探究というものをキーワードに、高大連携や高大接続をさらに豊かにするためには、何が足りていないのかということ、パネリストの皆さまから一つずつヒントを教えてくださいたいと思います。

ちなみに本日、溝上先生の本を3冊持ってきたのですが、特に『高大接続の本質』と『大学生の学び・入門』、そして『活躍する組織人の探究』での問題意識を京都から発信していかなければいけないと思っています。もちろん、京都だけの独占物であってもならないと思っていますが、探究と高大連携・接続の論点は非常に大きいです。ところで、先ほど、お昼を食べながら溝上先生に「先生は理事長として小中高大と見ていらっしゃる。同じ学園の中で、高大連携はどれだけ豊かに進んでいるんですか」とお尋ねすると「まだ、これからなんだよね」というお話でした。それも含めて、また、府・市・私立の立場からそれぞれ選抜の話もしていただきました。どうすればこういったものを豊かにできるのか、この論点について議論していきたいと思います。

それでは、酒井先生からお願いしてもよろしいでしょうか。どのようなことを話していただいても結構です。

酒井 おそらく、ここで言うべきことは、組織がいるであったり、教員にゆとりをといたことなのかもしれませんが、本音でお話しさせていただきますたいと思います。私は私学ですが、立

命館も附属校が複数ありますので、教育委員会とまではいかないとしても、学園の中に一貫教育部という組織がありますので、一定、委員会のイメージも湧かなくはないです。2つあるのです。

1つ目が、いろいろな取り組みをどこまで組織に付けるべきなのかという私の問いです。先ほど、溝上先生が、京都府教育委員会の取り組みに対して、希望者に行っていることが大事だと言われていました。本当に良き高大連携をしていこうと思ったときに、最終的には人と人との信頼関係が仕事のコストを最も下げること、私は学園の中にも感じるときがあります。組織としてつながらなければならなくなり、そのタスクだけがつながっていったときに、本当に良きものができるのだろうか。さらに思いでつながる仕組みがあることが重要ではないか。ただ、もしかするとA高校でうまくいったことが、ある先生がB高校に異動されると、B高校で盛んになるかもしれないというリスクがはらみますので、非常に発言しにくいことではあります。

もう1点が、したいことをすることを許せる学校文化をつくれるかどうか。生徒にはしたいことをしろとわれわれは言うのです。しかし、われわれ教員が、実は、しなければならないことばかりしているのではないかと思うときがあります。それはミスを謝ることから逃げるための仕事です。そこばかりに目が行ってしまっている現状があるのではないかと思います。われわれ教員もしたいことがあって教員になっているわけですし、部活も本来そこから始まっているはず。本音でお話をして、具体性がないのですが、私の思っていることです。以上です。

杉岡 ありがとうございます。コーディネーターの特権で、1点だけコメントをさせていただきますと、今、私が入っている京都府立福知山

高校では、土曜日に先生方の探究の発表会を10数年前から行っておられます。生徒に探究と言うだけではなく、学校の先生方自身も探究を行っている姿を見せていく。まさしく、そういったことを行おうという文化をどうつくるかが大事ですね。制度論ではなく風土論が大事ではないかと。

滝本先生、いかがでしょうか。

滝本 私は、この場に京都市教育委員会という形で登壇していますが、私個人の意見をかなり大きく入れながら話をさせていただこうかと思えます。京都市教育委員会として、今年から積極的に行っている取り組みとして、各学校の総合的な探究の時間を運営している先生が集まって、研究会を立ち上げています。一人一人の先生方が自校の総合的な探究の時間の取り組みや困り事、課題、アイデアなどを話し合うことを、毎月1回行えるようになっていて、非常に活発な議論が行われている状況が、実は生まれております。私は教育委員会という立ち位置におりながら、各学校の探究の活動の様子を見ていて最も思うのが、グループであれ、個人であれ、生徒一人一人が、自分が知りたいと思うことやしたいと思うことを追究する時間が保証されている状況は非常によい。

そのためにさまざまな教員に大変な負担がかかってしまうとよくないことは非常に分かりますが、先生と生徒たちがのびのびと自分の知りたいことを追究できる環境ができれば、非常に良いのではないかと。その知りたいを進めていく中で、高校側の話でいうと、大学の先生方、もしくは大学生、異年齢の方との意見交換をしたり、共にプロジェクトを起こしたりすることで、探究課題の解決に向かっていく流れもよくできていくのかなと思っています。私としては、ぜひとも、コミュニティと、アイデアを出し合う中で得られた時間の確保と、アイデアの共有、その中で異年齢の高校生と大学生

が入り交じったようなグループができて、自主的にアフタースクールの時間に探究課題を行っていく形がさらに進んでいけば非常に面白いのではないかと。総合的な探究の時間での学びが授業時間内にとどまらずに、外に出ていく。学校では、既に、学生ボランティアやティーチングアシスタントの大学生が出入りされたりします。そのあたりからつながりができていって、アフタースクールや高大年齢問わずのグループによって、さらに自主的な探究活動が活性化していく。そういう流れを委員会としても支援していければ、非常に面白いと思っております。

私からは、以上でございます。

杉岡 滝本先生、どうもありがとうございます。本当に大事な論点だと思います。先生方が集まれる場合は、先ほど、溝上先生からオンラインを活用すればとありましたが、距離を超えて集まれる時代に入っております。そして、先生方の時間をつくるためだけではなく、異年齢から学ぶことです。教えることを通して学ぶ、そして、それをまたさらにつないでいく形としてアフタースクールの話もありました。私も京都府北部で実践しておりますが、教えることを通して学びが完結に向かっていくのだらうと思いません。

伊藤先生、同じテーマで、いかがでしょうか。

伊藤 失礼します。理論的にも何もないコメントになってしまいますが、個人的な経験と気持ちだけでお話をすると、WWLを3年間、担当させていただいて、鳥羽高校や福知山高校の探究の授業をたくさん見せてもらい、発表会もさせてもらいました。少しつながったことがあります。酒井先生のご発表にあったとおり、与え過ぎずに、生徒たちが主体的に考えて動くことは、福知山高校が取り組んでいることに近い。福知山高校も、生徒たちが企業の社長にいきな

り電話をかけて、調査アンケートをさせていただきと言ひ、後から校長先生が怒られたというお話も何度か聞いています。しかし、そうすることで地域の課題を身近に感じて、行動できる力が付いているのかと考えが一致しました。

先ほど、お話しした京都府WWL高校生サミットでも、かなり難しいことを高校生に投げているのです。事前の準備資料も送って、当日も完璧にオンラインで、トラブルがないようにしています。当日は4~5人のグループで、そのブレイクアウトルームの空間で3時間くらい話し合わせるのです。誰も助けません。ただ、そのときも、全て共通しているのは、福知山高校でも、立命館宇治高校でも、われわれが取り組んできた中でつながったことは、生徒たちが、安心して、思い切って行動できて、失敗しても大丈夫、別に、それでよいのだという空間をつくって来られたことです。京都府WWL高校生サミットの当日でも、生徒たちが思い切って、非常によい発表をしてくれたのを目にしました。

そのため、おそらく、学校としてしなければならぬのは、その空間を提供してあげること。教員がびくびくしながら、もし生徒が「失敗して、何か苦情が来たらどうしよう」というのではなく、教師が思い切って「いいんだよ」と言えるような環境を学校がつくらなければならないし、教育委員会としては、そのような学校を許せる教育委員会をつくっていかないとイケないのかなと思います。全て個人的な感情という経験なので、なにも理論的ではありませんが、思い切って生徒たちが何かできれば、それが行動につながっていくでしょう。その環境をつくってあげることが大事というのが、今の課題であり、これからしなければならないことだと思いました。ありがとうございました。

杉岡 伊藤先生、どうもありがとうございます。「失敗」と書いて「けいけん」と読むと言った

商店街の会長がいましたが、失敗しても許すことが大事ですよ。『聴く』という文字は『ゆるす』とも読めます。聴くということで許してあげる。『親』という漢字も大事ですね。木の上に立って見ると書きますから。我慢して、あえて教えずに、待つ。私も教師の端くれであります。これがなかなか難しいわけです。しかし、教師がこれをしっかりと認識し、生徒と向きあっていくことの重要性を強調いただきました。

溝上先生、お願いしてもよろしいでしょうか。大き過ぎて、短くまとめることが難しいと思いますが、よろしく願いいたします。

溝上 頂いている質問と引っ掛けて、高大というところで、お話を1つしたいと思います。ちなみに、今、私は幼稚園から大学までの学校の理事長をしています。ただ、桐蔭学園では高校と大学の差があり過ぎて、中でつなぐことがなかなか簡単ではなく、どちらかという、高校は外の大学とつなげていますし、大学も外の高校とつなげている。こういうねじれが起こっているため、先ほど、少し難しいですねというお話をしたのです。

今の子どもたちは、ICTやデジタルコンテンツに慣れていきますよね。そういう子どもたちが大きくなっていくと、私たちに影響がありますかという質問を頂いています。私は、ここは非常に大事なところだと思っていて、この場でお話ししたいです。まず1つは、私は、今、文部科学省高等教育局でScheem-Dという、高等教育とDXというテーマで、大学や民間、NPOなどが、デジタルやICT技術、オンライン技術、例えば、先端技術でいうとメタバースやXR、AR、Web3.0などを、どのようにして大学の教育に入れていくかというアイデアを出して、それを商品化していくプロジェクトの委員長をしています。

皆さんは、オンライン授業という、先生が

左端か右端にいて、真ん中のスライドを見て、話しているというように思っているかもしれませんが、このようなものはこれからさらに淘汰されていく。もはや人が話す必要性はないですよ。もしかすると、格好よいアニメやアバターでもよいし、さらに言うと、平面でなくてもよいですよ。3次元空間でのカメラワークの技術が提案されていて、皆さん『鬼滅の刃』を見たことがありますか。走っているキャラクターをカメラがどこで追いかけて描かれているかという、ただ走っていても迫力が足りない、カメラワークが複数あり、あちらこちらに動いたり、途中でカットしてピッと行ったりします。そこに効果音もあります。つまり、カメラワークと音響を工夫して、話す人は格好よい芸能人やすごいアニメにして、話がきちんとしていれば、学生や生徒はそのコンテンツから離れられない。もちろん、内容は大事ですが、内容だけでは聞かないので、面白さを取り入れるオンライン授業の開発がますます提案されるわけです。それが決して遠くない将来に入ってきたときに、私たちは対面で何ができるのが問われてくる。

デジタルコンテンツは無限の可能性を秘めています。今の大学は学生たちに最先端を見せられるような環境ではなくなっている。むしろ、研究1つ取っても、大学がいつもすごいわけではなく、企業や研究所のほうが意外と優れていることもあります。あるいは、連携。そういう意味では、大学は非常によいように思っているかもしれませんが、大学からしてみると、今の大学はそれほどすごくないと思っています。オンラインコンテンツになれば、最先端の情報が誰でもアクセスフリーです。あるいは、ソーシャルメディアといったほうがよいかもしれません。別にコンテンツだけではなく、さらに情報が流れてきて、あそこへ行けばフェアをしていたり、ここへ行けば大学の先生ではなく企業の研究員が最先端の取り組みを報告

していたりする。

子どもたちの慣れもありますが、大変な勢いで進んでいる教育のデジタル化に、私たちはさらに勉強しないといけないと思います。私はデジタルの専門家でもないが、Scheem-Dというプロジェクトはいろいろな理由で座長をしていますが、していて非常に良かったと思い、一生懸命に勉強しています。そこには、EdTechの世界で有名な委員もいます。これがどれくらい入ってくるか分からないが、1%でも入ってくると、私たちは相当崩壊していきます。対面で生徒・学生を満足させられない教師は、おそらく、学校教育を急速に劣化させていきます。

私は、高校向けで言えば、学習指導要領の主体的・対話的で深い学びでよいから、しっかりできるように今のうちにきちんと行っておくべきだと思います。そういうことがしっかりできれば、あとは、ここはデジタルコンテンツに任せて、ここは高大でここまで行ってというように言えるようになります。しかし、人と人と勝負できない学校になっていくと、これはどうなるのか。相当格差社会というか、できる学校・できる教師とそうではないところの間が非常に開いていく。

私は、先ほど、YouTubeにインタビューしている動画があると紹介しましたが、Scheem-Dのいろいろなピッチイベントの事例を紹介していますので、ぜひ検索して、見て面白くなければ、すぐに止めてもよいので、一度見てみてください。そうすると、今、私がここで言っていることが多少は分かります。情報として知識を得ていく、そして私たちの対面の世界を磨いていく、そういう高大連携、あるいは学校の発展を考えてほしいと思います。

杉岡 どうもありがとうございます。今のお話は、われわれ地方に住み、学んでいる者としても追い風になると思います。少人数教育だから統廃合ということではなく、このいわゆる

EdTech を活用し、できることはたくさんあるのです。今日は時間がないので突っ込んだ議論はできませんが、希望と共に、ここで放っておくと全て奪われていきますよという、われわれ自身の学び直しの必要性ですね。そのようなお話だったろうと思います。

最後に、荒瀬先生、よろしくお願いいたします。

荒瀬 今、溝上先生がおっしゃったことを受けて、申し上げますと、要は人間関係というか、人が人を教えるというときに、何を教えて、どう引き出すのかという、当たり前の、アナログで古典的な教師像が、これからの人間の教師には大事になってくるということですよ。



溝上 そこに尽きると思います。

荒瀬 愛知県の春日井市立高森台中学校は、ICTの活用で非常に先進的のところですよ。なぜ先進的かと聞くと、校長先生が笑いながら「20年もやっていますから」とおっしゃるのです。先ほども少し申しましたが、長く行っていると道具になります。そのような中で、この校長先生が「基本は人間関係です」とおっしゃるのです。つまり、どれほど機械化、ICT化したとしても、結局は、人間である教師が人間の子どもを導いたり、教えたり、支えたり、伴走するということが大事なので、そこを基本として忘れてはいけない。

あとは、先生が本当に面白がっているかどうか、非常に大事になってくると思うのです。先生が面白がってもいないのに、生徒が楽しいはずがない。やはり、先生がわくわくしていたり、探究に興味を持っていないければ、探究に興味を持つ生徒が育たないと思うのです。不思議だな、これがこうなるとよいな、これをこうしてみようというような気持ちを先生方に持ってもらえるためにはどうすればよいかというと、やはり時間的な余裕ですよ。

先日、平田オリザさんが単純明快におっしゃっていましたが、先生の数を倍にすればよいですよ。先生の数を倍にすれば、相当な問題が解決しますよ。しないのは、問題を解決しようとする気がないのだろうが、だからといって、われわれが関係解決をしないわけではなく、われわれは中でも一生懸命に考えていかなければならないとおっしゃっていました。そうやってきたときに、やはり先生が何でもかんでもするというのは非常に厳しいので、例えば、生徒にさらに任せる時間や場面をつくってはどうかと思います。先ほど、滝本先生がおっしゃっていた中で、開建高校が「しなやか」という言葉を使っている、美術工芸高校も「しなやか」という言葉を使っている、思い出してみると、かつて堀川高校も「しなやかさ」と「したたかさ」と言っていたことがありました。しなやかな生徒はどうすれば育てるのか、育つのかというと「しなやかに育ちなさい」と言っても育たないと思うのです。あちらでぶつかり、こちらでぶつかり、たくさんの経験を積むことを通して、そのようになってくるかだと思います。

高等学校の卒業に必要な単位数は74単位です。生徒に求めるのは74単位にしませんかという提案です。ただし、その分、何をするのかを生徒と一緒に考えるような学校ができていくことが、今日、お話にあった、いろいろなところとつながっていくような気が私はしてお

ります。

最後にすみませんが、今日、ご紹介できなかった、東京都立国際高等学校の家庭科の授業です。家庭科の授業は、かつてから探究を行っていました。朝日新聞のデジタル版で検索できます。もう一つ、宮崎県立宮崎東高等学校の定時制夜間部の探究の取り組みも入れています。不登校経験があったり、学力的にも課題がある。しかし、定時制でなければできない探究があるということで行っていらっしゃいます。「哲学カフェ」の先生は、東京大学の哲学の先生です。「東大の先生が、定時制の？」というように、世間一般はまだ思うと思います。そういう思いからわれわれが自由になることが、生徒の学びの垣根を低くして学校が豊かになっていくのではないかと思います。

以上です。ありがとうございました。

杉岡 荒瀬先生、大胆なご提案をどうもありがとうございます。このパネルディスカッションの終わりの時間が迫ってまいりましたが、たくさんのお話を頂きましたので、この後もわれわれ自身も学びを続けたいと思います。

それでは、お時間が来ておりますので、簡単にまとめをしておしまいにしたいと思います。今、荒瀬先生からありました、そして5名の先生から頂きました、今日のテーマです。いろいろなテーマがありまして、一言でまとめきれませんが、要は高校だけや大学だけではなく、幼・小・中・高・大、そして社会へとトランジションリレーをどう回していくのか。そのヒントを今日5名の先生方から頂きました。そして、ICTやEdTech等のお話も頂きながら、今後、人間にしかできないことは何かということも同時に突き付けられている時代に、われわれは生きていることも確認しました。

その中で、われわれ人間にしかできないことを考えなければいけません。ソーシャルという言葉があります。これを社会と訳すのではなく

「人間交際」と訳すのだと言ったのは福沢諭吉であります。このように、人と人とのつながりが社会のつながりであり、高校の段階から生徒を学校の中に閉じ込めるのではなく、生徒が学校の中から飛び出すお手伝いをし、多様な方々と、公立、私立の学校の枠も超えてつながっていく。そうした中で失敗してもよいという時空間、そして仲間の「間」ですね。この間というものをごどうプロデュースできるのか。これがわれわれ教育関係者、あるいは学校関係者に試されているのではなかろうかと思った次第です。今日はアフタースクールの話もありました。また、企業の研究が進んでいるという話もありました。まさしく学校だけで教育を閉じるのではなく、いろいろな人を巻き込みながら、この「間」をつくっていく。そうすると、間に合うわけです。この間が抜けてしまうと、間抜けになってしまうわけです。この間を大事にすることを、今日のまとめにならない「ま」とめといたしまして、今日のセッションを閉じたいと思います。ありがとうございました。



なお、紹介できなかった質問等は、来年度以降も続けてまいります、本フォーラムの議論の素材とさせていただきたいと思います。

最後に、ご登壇いただきました5名のパネリストの先生方への感謝の拍手でもって閉めたいと思います。どうもありがとうございました。

伊藤 恵哉（京都市教育委員会 高校教育課 指導主事）

スライド1

事例報告

Society 5.0で活躍できる人材育成

令和2年度指定文部科学省
「WWLコンソーシアム構築支援事業」に
おける**高大連携・接続**について

京都市教育庁指導部高校教育課
指導主事 伊藤恵哉

スライド2

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

将来、**世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するため**、これまでのスーパーグローバルハイスクール事業の取組の実績等、グローバル人材育成に向けた教育資源を活用し、高等学校等の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら、**高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組み（ALネットワーク）の形成を目指す取組**である。

出典：WWLコンソーシアム構築支援事業実施要項（文部科学省）

スライド3

京都市教育委員会 構想計画

構想名：未来を創る課題解決先進国の人材育成 ～京の智から地球の智へ～

新たな教育の仕組み「ALネットワーク京都」が3つの京都戦略により「豊かさ」の価値を再創出し、高い理想と夢を抱いた「京都モデル」で日本、世界をリード

育成人材 6つの力

①歴史をとおして世界を俯瞰する力
②多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
③科学的に思考・分析する力
④新たな課題を創造する力
⑤課題解決の枠組みをデザインする力
⑥課題を突破する力

京都戦略1 高度で先進的な学びの機会を提供

京都戦略2 グローバルかつ多様な協働学習の機会を創出

京都戦略3 研究開発内容の共有と継続的な成果普及

スライド4

京都戦略1 高度で先進的な学びの機会を提供

- ◆海外インターンシップ グローバル企業での就業体験を単位認定
- ◆きょうとAPP 単位認定を見据えた大学教育の先取り履修
- ◆STEAM教育 京都の事物を題材にした文理融合の学び
- ◆京都古典・歴史学 京都の伝統・文化の神髄に触れる学び

京都戦略2 グローバルかつ多様な協働学習の機会を創出

- ◆イノベーション探究ⅡⅢ 持続的な未来社会の創造に挑む課題研究
- ◆府立高校海外サテライト校事業 府立高校生の中期留学を単位認定
- ◆府立高校共通履修科目「スマートAP」 国内外大学の遠隔講義を単位認定
- ◆京都府WWL高校生サミット 世界の高校生による新たな価値創造

京都戦略3 研究開発内容の共有と継続的な成果普及

- ◆京都府WWLプラットフォーム ポータルサイトによる情報共有 指導計画や教材の蓄積 事業成果の発信と普及
- ◆京都府WWLフォーラム 研究開発成果の一般公開
- ◆京都府WWL教員研修 世界の教員間で協働研修

スライド5

大学・大学教員と協働した取組

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

② 大学教育の先取り履修 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（APP）」

スライド6

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

イノベティブなグローバル人材に求められる資質・能力として、本府WWLコンソーシアム構築支援事業が定義する6つの力のうち、主に次の3つの力の育成に関連し、大学との協働による高度で先進的な学びのプログラムを提供し、大学教育との効果的な接続に資する。

- ②多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
- ③科学的に思考・分析する力
- ⑤課題解決の枠組みをデザインする力

スライド7

1 府立高校共通履修科目「スマートAP」

目的
希望する高校生に、グローバルな社会課題の解決に必要なリサーチスキルを習得させるとともに、イノベティブなグローバル人材の基盤となる論理的・批判的思考力と多文化協働力を育成

内容
高校2年生を対象に、6名の大学教員によるリレー講義・ワークショップから成るプログラムをオンライン又はオフラインで受講し、その成果を踏まえて京都府WWL高校生サミットに参加※「取組が十分である」と認められたものには修了証を府教育委員会が発行し、**在籍校の単位**として認める。

スライド8

1 府立高校共通履修科目「スマートAP」

カリキュラム開発から実施までの流れ

令和2年度 → 令和3年度 → 令和4年度

- 制度設計
鳥羽高校SGH事業をベース
- 講師依頼
遠隔実証研究
- 対象校
鳥羽（拠点校）
福知山（共同実施校）
- 在籍校から接続
20名参加
- 対象校
鳥羽・福知山・洛北
嵯峨野・南陽・峰山
※WWL事業連携校
かつBYOD先行校
- 自宅から接続
27名参加

スライド9

参加校

2022 京都府公立高等学校
スクールガイド（一部抜粋）

スライド10

令和4年度実施 プログラム内容

回	日程	テーマ・内容	形式（場所）
第1回	4月16日（土）	導入・リサーチスキル①「課題研究の意義、問いの立て方」 杉岡秀紀氏（福知山公立大学地域経営学部 准教授） 江上直樹氏（大阪大学教育学部 講師）	遠隔
第2回	5月7日（土）	リサーチスキル②「研究テーマの決定-RQの設定と仮説の構築-」 乾明紀氏（京都府立大学経済学部 准教授）	遠隔
第3回	6月4日（土）	リサーチスキル③「研究方法について-質的研究と量的研究-」 神吉紀世子氏（京都大学大学院工学研究科 教授）	遠隔
第4回	7月16日（土）	多文化協働の手法「Team Work and Collaboration」 Rebecca Avelson氏（豪州・クイーンズランド工科大学）	遠隔
第5回	7月30日（土）	論理的・批判的に考える 柿澤寿徳氏（大阪大学国際共生大学院学位プログラム推進機構 准教授）	遠隔
第6回	8月20日（土）	リサーチスキル④「チームでフタを開ける！-研究計画書を作ろう-」 乾明紀氏（京都府立大学経済学部 准教授）	対面 (鳥羽高校)
第7回	9月17日（土）	リサーチスキル⑤「プレゼンテーションの技法」・まとめ 杉岡秀紀氏（福知山公立大学地域経営学部 准教授）	遠隔
第8回	10月29日（土）	京都府WWL高校生サミット	遠隔 (在籍校)

遠隔実施に変更

スライド11

1 府立高校共通履修科目「スマートAP」

各授業の構成及び時間

第1回～第7回：大学教員による講義・ワークショップ
→ 90分×2コマ

生徒によるレポート作成・ふりかえり
→ 30分

第8回：京都府WWL高校生サミット
→ 280分

計1750分
(高校における授業時間数35時間相当※1授業時間数=50分)

スライド12

講義内容の連携

探究から研究へ

第8回
京都府WWL高校生サミット

第7回
プレゼンテーションの技法

第6回
協働作業による研究計画書作成

第1回～第5回
探究に係るリサーチスキル等の学び

スライド13

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

京都府WWL高校生サミット（高校生国際会議）

■ 府立高校及び他府県連携校から参加者を募り、「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」をテーマに、少人数のグループで、設定したトピックのうち1つについて、オンライン上で日本語又は英語で議論

トピック

I 「文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出」
II 「科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出」
III 「多文化共生による平和で安心な未来社会の創出」

スライド14

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

R4 京都府WWL高校生サミット

■ 講評者
杉岡秀紀氏（福知山公立大学）
ステイーブン・ハーダー氏（京都ノートルダム女子大学）

■ 令和4年度参加校（者）

スマートAP受講者、府立高校（7校）、秋田県立秋田南高校、学校法人九里学園高校、沖縄県立那覇国際高校、豪州・Mansfield State High School、留学生（京都府名誉友好大使、京都外国語大学等）

スライド15

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

昨年度の修了者の声

■ 何よりも大学教授のお話を聴けることが魅力。高校では得がたい知的刺激を得た。

■ 学んだ探究のプロセスを大学での研究活動に生かしたい。

■ 自分なりの課題意識から問いを立てるということを大学の卒論でも大事にしたい。

スライド16

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

今年度の参加者の声 ※第7回終了時点

■ RQ(Research Question)は自分一人で考えるのが、自分の思い通りにでき楽だと思ったこともあったが、班の人たちと共有することで客観的に考えられるとわかった。RQ一つ立てるのにも、考えていくうちに根本からRQが変わったり、丁寧にすればするほど精度の高いRQができていくのが面白かった。

※メタ認知力の向上

スライド17

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

成果

■ 「大学の初年次教育との接続を図ること」と「各校における探究学習の指導に生かすこと」を意識し、探究の「作法」を一通り学ぶことができるプログラムを研究開発した。
→ 高校の探究活動を熟知されている各講師と目的・目標の共有及び入念な打合せ

■ 生徒がグループワークを通して1つのプロジェクトに取組、成果物にまとめ発表できるよう各回の講義内容の連携を図った。
→ 各回の講義内容を講師間で共有

スライド18

大学・大学教員と協働した取組

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

② 大学教育の先取り履修「きょうとアドバンスト・プレイメントプログラム（APP）」

スライド 19

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

令和3年度学校教育法施行規則の改正について

●科目等履修生として大学で一定の単位を修得した高校生等（大学入学資格を有さない者）が、その後当該大学に入学する場合、当該大学が定めるところにより、修得した単位数、その修得に要した期間等を勘案して修業年限の通算を行うことを可能とした。（令和3年10月29日公布・施行）

【例】

※高校生を対象として通常授業の履修機会を提供している大学は約28%
 ※高校生の科目等履修生は約1,500人となっている。（いずれも平成30年度時点）

出典：「令和3年12月13日特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議（第6回）資料2」（文部科学省）（https://www.mext.go.jp/content/202112017-mxt_kyoiku02-000019034-003.pdf）（令和4年10月21日に利用）

スライド 20

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

本プログラムは、十分な能力と意欲を有する生徒が在学中に高度な学びにアクセスできる機会を保障することにより**高校教育と大学教育の円滑な接続**を図り、京都の知を活かし、持続可能な未来社会の創出に貢献できるイノベーティブなグローバル人材の育成に資することを目的とし、**京都府立大学、福知山公立大学及び京都府教育委員会の協働により実施するものである。**

スライド 21

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

概要

- 生徒に各大学の正規授業の履修機会を提供するため、各大学と教育委員会の協働により大学教育の先取り履修プログラムを開発する。
- 受講方法はオンライン配信を基本とし、具体的には各大学において定める。
- 令和4・5年度の2年間で**試行期間**とする。
- プログラムの修了者には大学から修了証を交付し、**在籍校で高校の単位**として認定する。

スライド 22

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

先行事例の調査から試行開始までの流れ

■先行事例の調査
 埼玉大学

■2大学と協働し、制度設計
 ■先行事例の調査
 広島県教育委員会
 広島大学
 県立広島大学

■試行開始
 ※身分は聴講生
 ■対象
 鳥羽・福知山
 （全学年）

スライド 23

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

<p>京都府立大学</p> <p>後期科目（10名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 教養教育センター「現代社会と法」 ■ 公共政策学部「コミュニティワーク」 ■ 生命環境学部「森林の科学」 	<p>福知山公立大学</p> <p>前期科目（6名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 地域経営学部「経営学入門」「多文化共生論」 ■ 情報学部「エンタテインメント情報学」 <p>後期科目（6名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 地域経営学部「地域協働論」 ■ 情報学部「ゲーム情報学」
---	--

スライド 24

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

受講状況 ※前期終了時点

○大学が定める要件を満たし、6名全員が修了した。
 ○大学側のご配慮により事前オリエンテーションを実施していただいたため、自宅からの受講は概ね円滑に行われた。

▲大学からのメールによる連絡・指示が伝わらないことがあった。
 ▲数回分の授業をまとめて視聴し、遅れて授業レポートを提出するケースがみられた。

スライド 25

② 「きょうとアドバンスト・プレイズメントプログラム」

生徒アンケート ※前期終了時点

- 受講科目について、全員が「非常に満足している」と回答
- 授業の内容理解について、6名中5名が「概ね全ての講義を理解」したと回答
- 受講して良かったことについて（複数選択式）

① 講義の内容が興味深かった	5名
③ 進路を考える上で役立った	4名
④ 自ら学ぶ姿勢が身についた	4名
⑤ 知識の習得に役立った	4名
⑥ 思考力・表現力の育成に役立った	3名

25

スライド 26

② 「きょうとアドバンスト・プレイズメントプログラム」

生徒の感想 ※前期終了時点

- 以前から気になっていた学問だったため、大学の学科選びに役立った。知らないことを知ることは楽しく、だからこそ大学で学ぶ学科は慎重に選ぶべきだと思った。
- 私の知っていることは遅れているし、思っていた以上に凄い技術にあふれていることを知った。これからもアンテナをはって生活をしていきたい。
- 最終レポートは1,600字以内で書くものでしたが、図書館で本を借り、高校で作成したレポートを振り返りなどし、レポートを提出することができた。

26

スライド 27

② 「きょうとアドバンスト・プレイズメントプログラム」

生徒の感想 ※前期終了時点

- ▲ Wordをあまり使った経験がない状況で、PDFでレポートを提出する必要があり最初は戸惑った。
- ▲ 高校のテスト期間中も講義はあるため、時間の使い方が大変だった。
- ▲ 定期的に講義を視聴しなかったため、まとめて視聴してしまい、担当の先生にご迷惑をかけてしまった。
- ▲ 事前に説明を受けたが、授業支援システムの登録方法やその使い方に困り、講義の視聴が遅れた。

27

スライド 28

② 「きょうとアドバンスト・プレイズメントプログラム」

大学教員の意見 ※前期終了時点

- 大学生との能力の差は感じられず、円滑に授業を実施できた。
- 一般的な大学生より意欲的で、課題やレポートの出来も遜色ない。
- 熱心な取組姿勢が教員側により刺激となる。
- ▲ 授業形式が異なる（大学生＝対面、高校生＝オンライン）場合、教員側の負担が増す。
- ▲ 授業の録画について、著作権の問題から、大学生の授業に制限がかかることがある。
- ▲ 高校生を受け入れることの大学側のメリットがあまり感じられない。

28

スライド 29

② 「きょうとアドバンスト・プレイズメントプログラム」

今後の府教委としての検討事項

- 協働大学にメリットのある「きょうとAPP」は実現可能か
- 大学入学後の単位として認定可能か
- 対象となる高校を拡大できるか
- （将来的に）他大学とも協働できるか
- （将来的に）大学間の単位互換の可能性はあるのか

29

スライド1

第20回高大連携教育フォーラム

京都市立高校の 学校改革

令和4年12月3日
京都市教育委員会学校指導課
指導主事 滝本順之

1

スライド2

京都市立高校学校改革の軌跡

平成7年(1995年)
21世紀を目前にして、市立高校の更なる発展と21世紀の時代に生徒に育むべき資質を見据え、次代を展望した魅力ある新しい市立高校の在り方を検討するため、「京都市立高等学校21世紀構想委員会」を設置

↓

「答申」に基づき、堀川高校をパイロット校として位置付けた新たな普通科系専門学科(=人間探究科,自然探究科)を創設

2

スライド3

京都市立高校学校改革の軌跡

＜主な市立高校改革の経過＞

- 平成11年(1999年) 堀川高校に人間探究科, 自然探究科を設置
- 平成15年(2003年) 西京商業高校を改編し西京高校エンタープライジング科を設置 (翌16年 附属中学校併設)
- 平成19年(2007年) 塔南高校に教育みらい科を設置
- 平成21年(2009年) 日吉ヶ丘高校の英語科を国際コミュニケーション科へ改編
- 平成22年(2010年) 音楽高校を城裏の地へ移転し, 京都堀川音楽高校に校名変更
- 平成26年(2014年) 京都市・乙訓地域の公立高等学校入学者選抜制度の改革 日吉ヶ丘高校を進学型単位制普通科へ移行 紫野高校の普通科第三類英文系をアカデミア科へ改編
- 平成28年(2016年) 洛陽工業高校, 伏見工業高校の再編・統合により 京工工学院高校を創設

堀川高校改革以降も、社会の変化を見通した新たな教育改革に一早く取り組み、全国に先駆けた教育改革を実現

3

スライド4

令和の世において…

一層急速な社会の変化と生徒のニーズの更なる多様化進む。

学習指導要領改訂の考え方

新しい時代に必要な資質・能力の育成と、学習者の充実

学習指導要領改訂の考え方

学習内容の確実な定着

学習内容の理解を深め、広げる

一人一人に応じた学習活動・学習課題の提供

一人一人に合った学びの提供

必要に応じた重点的な指導・指導方法等の工夫

各々の特性・学習進度・学習到達度等

各々の興味・関心・キャリア形成の方向性等

指導の個別化

学習の個性化

個別最適な学び (教師視点では「個に応じた指導」)

異なる考え方が組み合わさりよりよい学びを生み出す

多様な他者と協働

一人一人のよい点・可能性

協働的な学び

クラスメイト

異学年の子供

他校の子供

地域の人

等

スライド5

令和の世において…

新しい時代の高等学校教育の実現に向けた制度改正等について (概要)

○ 「[令和の日本型学校教育]の構築を目指す(答申)」(令和3年11月26日 中央教育審議会)及び「[新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ(審議まとめ)]」(令和2年11月13日 同ワーキンググループ)等を踏まえて、学校教育法施行規則、高等学校設置基準、高等学校設置教育規程等の一部改正等を行うこととする。

1 各高等学校の特色化・魅力化 【学校教育法施行規則・高等学校設置基準の一部改正、通知事項】

- ◆各高等学校に期待される社会的役割等の再定義
 - 高等学校の設置者は、高等学校が下記の「三つの方針」を策定する前提として、各高等学校やその立地する市区町村等と連携し、つとめ、各高等学校に期待される社会的役割等(「いどゆるスクール・ミッション」)を再定義することが求められる。
- ◆高等学校における「三つの方針」の策定・公表
 - 高等学校は、当該学校、全日・定時・通信制の課程又は学科ごとに以下の方針(「いどゆるスクール・ポリシー」)を定め、公表するものとする。
 - (a) 高等学校の学習指導要領(定まること)より育成を目指す資質・能力に関する方針
 - (b) 教育課程の構成及び実施に関する方針
 - (c) 入学費の受け入れに関する方針
- ◆高等学校と関係機関等との連携協力体制の整備
 - 高等学校は、当該学校における教育活動その他の学校運営を行うに当たり、関係機関等との連携協力体制の整備に努めることとする。(※) 令和4年4月1日から施行

2 普通科改革 (高等学校における「普通教育を主とする学科」の弾力化) 【高等学校設置基準・高等学校学習指導要領の一部改正】

- 普通教育を主とする学科として、普通科以外の学科を設置可能とする。
- 普通科以外の普通教育を主とする学科においては、各学科の特色等に依り、学校設定教科・科目を設け、2単位以上全ての生徒に履修させるなどして教育課程を構成することとする。
- 普通教育を主とする学科のうち、学際領域に関する学科及び地域社会に関する学科については以下のとおりとする。
 - (a) 学際領域に関する学科については大学等との連携協力体制を整備するものとする。
 - (b) 地域社会に関する学科については地域の行政機関等との連携協力体制を整備するものとする。
 - (c) 上記2の学科は、関係機関等との連携関係を行政機関の配置その他の措置を講じるよう努めるものとする。(※) 令和4年4月1日から施行

4

スライド6

市には高校設置義務なし。
市立高校は、より一層の特色化・魅力化により、存在意義を示す使命がある。

京都市立高校スクールミッション再定義

↓

市立高校スクールミッションを前提として、各校と意見交換しながら、各校スクールミッションを策定

↓

各校が3つのスクールポリシーを作成
自校のグランドデザインを表現

6

スライド7

京都市立高校スクールミッション

京都を未来へつなぐ
京都の学校文化を継承・発展させ、
京都の発展に寄与する学校

京都から高校教育を先導する
先進的で魅力ある教育を創造・実践・発信し、
いつの時代も市民に信託される学校

京都の魅力を重ねた学びに
魅力あふれる都市特性やその価値を活かし、
京都ならではの豊かな学びを実現する学校

京都府は1200年を超える歴史と文化を誇る。その歴史は、伝統を重んじつつ
常に時代を先導する気風と開かれた文化を育み、その精神は多くの市民の心に
刻み込まれ、京都の文化を形作る重要な要素となっている。

その精神は、京都府の教育の根幹をなす「伝統と発展」であり、その精神に基づいて
京都府立の各高等学校は、伝統的な教育を受け継ぎながら、最新の教育技術と
最先端の教育環境を整え、多様な可能性を育むための学びの場を提供する。また、
京都府立の各高等学校は、伝統的な教育を受け継ぎながら、最新の教育技術と
最先端の教育環境を整え、多様な可能性を育むための学びの場を提供する。

京都府立の各高等学校は、伝統的な教育を受け継ぎながら、最新の教育技術と
最先端の教育環境を整え、多様な可能性を育むための学びの場を提供する。

京都府立の各高等学校は、伝統的な教育を受け継ぎながら、最新の教育技術と
最先端の教育環境を整え、多様な可能性を育むための学びの場を提供する。

スライド8

School Message (スクールメッセージ)

その「わくわく」が、あいたい未来

京都市立開建高等学校 エンターテインメント グランドデザイン

「希望をもって未来を協創することを通して、
生徒一人一人が新しい自分を見つけ、自らの成長を実感できる学校」

「一人一人の子どもを徹底的に大切に」という京都市の教育理念
中学生の様々な教育的ニーズとともに個の多様性にも的確に対応

より専門性の高い学習内容に生徒が主体的かつ探究的に取り組むことで、個
の可能性を広げ、社会の様々な分野で活躍できるように

**市立高校各校は、各校の個性や専門性を生かした
アプローチにより、目標実現に向かって取り組む。**

11

スライド9

令和3年4月、京都奏和高校 開校

令和5年4月、開建高校、美術工芸高校 開校

20年以上にわたる一連の学校改革の取組の中で実現。

生徒に育むべき資質・能力の明確化
多様な可能性及び能力を個性や特性等に応じて最大限に伸ば
高等教育機関や 実社会との接続機能を果たす
持続可能な社会の担い手を育成

「一人一人の子どもを徹底的に大切に」という京都市の教育理念
中学生の様々な教育的ニーズとともに個の多様性にも的確に対応

より専門性の高い学習内容に生徒が主体的かつ探究的に取り組むことで、個
の可能性を広げ、社会の様々な分野で活躍できるように

**市立高校各校は、各校の個性や専門性を生かした
アプローチにより、目標実現に向かって取り組む。**

12

スライド10

京都市立開建高等学校

設置学科：ルミノバージョン科(その他普通教育を施す学科)
募集定員：240名
教育目標：より良い未来をめざし、個性を活かして社会を協創
する生徒の育成
指導方針：「自分らしく生きていくために必要な、自ら考え自
ら学ぶ力」をつける学び

「希望をもって未来を協創することを通して、
生徒一人一人が新しい自分を見つけ、自らの成長を実感できる学校」

13

スライド11

「新たな学びの形」の実践

授業のアプローチを変える → 「伝える」から「考えて至らせる」
教室の形を変える → L-pod空間を活用した多様な学び

問いから始まる学び
開建高校 学びの3原則
対話・協働での学び 個に応じた学び

自ら考え、自ら学ぶ

すなわち
教わる → 自分で考える → 他者と何かを共に創る

このように学びの主体を生徒にシフトする

14

スライド12

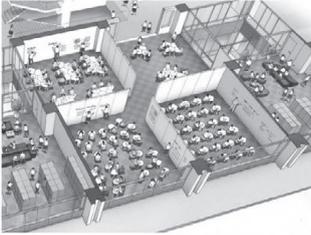
問いからはじまる学び

○授業は思わず考えたくなる
「問い」から始まります。

○開建の授業では、
「問い」に向き合うことで、
様々な「考え方や学び方」を
学んでいきます。

15

スライド 13



**学習スペース
L-pod (エルポッド)**

- ・4つの普通教室サイズに区切ること可能
- ・壁が全てホワイトボード

(内装は予定です)

多様な形態がとれる新しい学習空間で、「生徒の数と同じ数の学びと進路がある」という考えのもと、生徒自身が設定した目標に向かって、自分に適した方法で学ぶスタイルを生徒と教員で創ります。

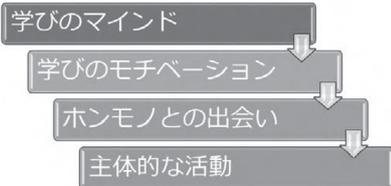
ホームルーム活動も、生徒80名と複数の担当教員で行います。この形がスクールライフの基本単位となります。

13

スライド 14

「総合的な探究の時間」を中核とした学び
3年間を通して、教育活動の三本柱に取り組みます。より良い未来社会の創造を目指して、探究に必要なスキルや手法の修得、未来の創り手となる志、自己を成長させるマインドを育みます。

特に、あらゆる機会を学びの機会と捉えて、「成長することが成功だ」という成長マインドセットにつなげる学びの場面です。



14

スライド 15

**開建高校が目指すもう一つの姿は、
生徒が創る学校**

授業も、学校生活のルールも、
しなやかに変化し続ける学校

学校を変化させていく中心は生徒であり、
生徒と教師が一緒になって学校を協創して
いくことを目指します。

スライド 16

京都市立 開 建 高等学校
開建高校のキャッチフレーズ・・・
「 やってみたい を やってみる
～夢中になる学びがここにある～」

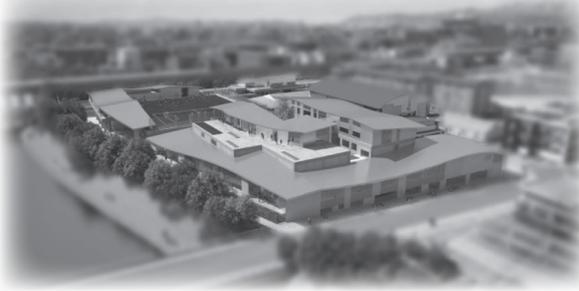
↓

- ・楽しみながら夢中になって学んでほしい。
- ・様々な活動に果敢に挑戦してほしい。
- ・学ぶことの楽しさや喜び、考えることのすばらしさを体験してほしい。

16

スライド 17

京都市立銅駝美術工芸高等学校
2023年春、京都市立美術工芸高等学校として移転開校



17

スライド 18

美工の教育理念と目標

教育理念 自由快活な校風のもとで多様性を尊重し共に高め合い、美の精神をもって広く社会に貢献できる高い理想をもった創造性豊かな自立した青年を育成する	教育目標 多様なものごとに触れ、美しさや本質を見出す「感じる心」を豊かにする。主体的に取り組み、広い視野で柔軟に深く思考できる「考える力」を伸ばす。幅広い美術の知識や技能を学び、自分の思いや考えを形にする「表現する力」を高める
目指す学校像 「美」で未来への希望を創る学校	育成する資質・能力 「感じる心」 … 観察眼・発見力・感性 「考える力」 … 論理的思考力・判断力・発想力 「表現する力」 … ものがたり力・ものづくり力・行動力
育てる生徒像 しなやかに、新たな自分を描く人へ	

18

スライド19

8専攻を擁する

日本画 洋画 彫刻 漆芸

陶芸 染織 デザイン ファッションアート

広く深い学び

19

スライド20

新しい教育活動の創出

予測困難なこれからの社会の中で将来にわたって学び続ける人材を育む授業改革

ストーリーテラーを育てる

BIKOsteAm スチーム

BIKOの学びをARTでつなぐ

美術教科・普通教科・総合的な探究の時間・特別活動・課外活動それぞれの柱組を「美」を通して横断的に学習。

京都の強みを生かし、学校内外とのつながりを通して表現活動の基盤となる「感じる心」「考える力」「表現する力」を深めます。

20

スライド21

予測困難なこれからの社会の中で将来にわたって学び続ける人材を育む授業改革

BIKOsteAm スチーム

美を通じた教科・分野の横断的な学び

染織 浴衣制作 × 理科 観察

「双眼顕微鏡を覗くと植物の違った顔が見えてきて 発想がひろがる…」

21

スライド22

「京都」で学ぶ (1)京都市立芸術大学との連携

京都市立芸術大学や様々な外部機関との連携を通じた学びの創出

日常的に大学生の制作風景に触れ、主体的な交流・連携が生まれる仕掛けを構築し、新たな高大連携の取組を推進し、キャリアデザインにつなげます。

隣接する京都藝大や地元の小中学校や企業等の外部機関との連携を図り、新たな産官学連携を推進するとともに、様々な世代と交流します。

京都市立芸術大学との共用施設

- グラウンド
- 体育館
- 食堂

21

スライド23

「京都」で学ぶ

京都市立芸術大学や様々な外部機関との連携を通じた学びの創出

隣接する京都藝大や地元の小中学校や企業等の外部機関との連携を図り、新たな産官学連携を推進するとともに、様々な世代と交流します。

(2)地域の小学校・中学校との交流

下京渉成小学校
下京中学校

(3)京都の伝統産業に触れる取組

キャリアアップ職産(インターンシップ)

22

スライド24

生徒のキャリア形成力と Creatorshipを育む

CAREER PRODUCE

予測不可能な社会で生涯にわたって学び続け、自分の未来を切り拓き、探究し続ける基盤を築くことにつながる美工での3年間の学びと教育活動を具現化。

23

京都市立京都奏和高等学校

課程・学科	定時制課程・普通科(単位制)	通学区域	京都市内全域
規 模	1学年80名、1クラス20名程度	修業年限	3年か4年を選択
選抜方式	特別入学者選抜(公立前期選抜と同じ日に行います)		
出願資格	不登校経験のある生徒や、行動や認知の特性による学びに困りがある生徒、その他学び直しを必要とする生徒(中学校長の副申請が必要)		

本校で学んでほしい生徒像
様々な困りがあり、義務教育段階や高校において学びのつまづきを経験しながらも、就職や進学を見据え、学習意欲を持って学習支援や「学び直し」を求めている生徒。

次のような想いを持っている人

学習上の困難やつまづきを感じ、学び直しから始めたい。
学校生活に不安を感じているが、上手に人間関係を築きたい。

次点を京都奏和の魅力と感じる人

新しい環境の中で、サポートできるので、安心して学べる。
時間割等の特長が決められているので安心して学べる。

25

京都奏和高校の教育

大切にしている3つのこと

大切にしていること

自分らしく学ぶ

個に応じた支援・指導を受けることで、自分の未来に向かって一つ一つの学びを積み重ねます。

大切にしていること

集団で学ぶ

相手の気持ちを理解し、お互いに尊重し合える関係を築くことで、学びを深め、社会生活を送るための土台を築きます。

大切にしていること

様々な人と出会う

多様な価値観に触れ、様々な人間関係を築くことで、社会とのつながりの大切さを学びます。

26

育みたい6つの力と目指す姿

自分のペースで「自分らしく学ぶ」、仲間と「集団で学ぶ」、そしてその過程で「様々な人と出会う」。

このような、京都奏和高校ならではの学び方を通じて、右に示した6つの力を育てていきます。

そしてその力をもって、それぞれが、社会の一員として自立し、豊かな社会生活を送れる人に成長しているように、様々な授業・取り組みによってサポートします。

高校での学びの土台となる学力

進路を切り拓くための学力

コミュニケーション力

課題発見力・解決力

自己判断力・行動力

自己肯定感・自己有用感

目指す姿
自立するための基礎を身に付け、社会の創り手として主体的に行動し、豊かな社会生活を送ることができる

27

ランアップ

中学校までの学びを確認し、高校での学びにつなげるための「助走(ランアップ)」として、国語・数学・英語の3科目で実施します。サポートのもと、個別に学習目標を設定して取り組みます。

Pick Up
専攻のスキルアップ

高校入学 8月 高校での学び

高校での学びに入る前に、中学までの学びを確認する「助走期間」(1~4学年)の取組を行います。

国語 数学 英語

中学までの学び

- 4月~6月ごろまでの期間に、中学以前の学び直しの授業を実施。
- 生徒はiPadを活用(全員に貸与)。
- 1クラスに教員2名が入り、生徒を見取る。
- 卒業までに定着を目指す「高校での学びの土台となる学力」へつなげる取組。

28

ビジテック

ビジネス(商業)とテクノロジー(工業)を掛け合わせた本校独自の授業です。ものづくりやマーケティングなどを学び、2年次以降は地域や社会と連携した取り組みを行います。

ビジテック I ・キャリア I (学校設定教科「キャリアデザイン」)
SST(ソーシャルスキルトレーニング)
他の人と関わりながら生きていくために欠かせないスキルを身に付ける訓練
ものづくり・まちづくり
工業科の教員が担当し、キーホルダーや住宅模型作りに挑戦
ビジネス・デザイン
商業科の教員が担当し、ビジネスマナーについてペアワーク、グループワークや自分の特性を示した名刺作りを通して自己表現を経験

ビジテック II (総合的な探究の時間)で学びを深める

10/19(水)NHK総合ニュースほっとかんさい「幸せニュース」で放送
保育園の子もたちに自作のおもちゃをプレゼント。

29

Pick Up ミリョクいっぱい「奏和タイム」

京都奏和高校は個性を大切にしながら、集団でたくしく主体的に学んでいける取り組みを重視して、「奏和タイム」という時間を設定しています。副活動、自主活動、特別活動など、1~4部の生徒がそれぞれに楽しみながら、それぞれの個性を活かすことで育んでいます。

部活動
体育系・文化系のクラブ合わせて14の部活動が課外活動しています。

体育系クラブ
剣道・山形・卓球
文化系クラブ
吹奏楽部・合唱部
読書部・演劇部
ダンス部
バドミントン部
バレーボール部

特別活動
毎週大会、体育祭、文化祭、講演会など、部の垣根を超えて行う行事やイベントなどを実施しています。

地域・外部団体のイベント
地域の方やさまざまな外部団体の方と交流しながら、互に学び合っています。

図書館
「読書」に関する1冊に読まれた、広く読書家のある読書者、読書の楽しさを伝える活動を行っています。

- 1~4部の生徒がともに交流し、学校として一体感が持てる時間。
- 生徒同士や教職員だけでなく、地域の方や異年齢の方との交流により自己肯定感や社会活動スキルの向上を目指す。

30

スライド 31



昨日、NHKにて放映されました。

NHK+で配信されています。よろしければご覧ください。

かんさい熱視線 「もう一度この教室から 再出発・高校生の8か月」

12/2(金) 午後7:30 ~ 午後7:57

配信期限：12/9(金) 午後7:57 まで

概要
不登校や対人関係が苦手など、さまざまな“困り”を抱えた生徒が集まる公立高校が京都市に誕生した。社会で自立して生きていく力を身に付けようと試行錯誤する学校の記録。

31

スライド 32

ご紹介させていただいた3校だけでなく、市立高校各校、自校の特色を生かした、持続可能な社会の担い手を育成する教育に取り組んでおります。

ご清聴、ありがとうございました。



各高等学校からのお知らせ

スライド 1

第20回高大連携フォーラム

「コア探究の取り組み」
～探究とキャリア教育が核となり、生徒が社会を創る～

Your Link to the World

酒井 淳平
立命館宇治中学校・高等学校
(キャリア教育部長・研究主任)
junpei@ujc.ritsumeai.ac.jp



スライド 2

はじめに

- 本校はWWL第一期指定校です！
 - ・全国14校+海外7校と連携 (文科省の大きな指定を受けている学校も多数)
 - ・12の企業・団体と連携

➡ ネットワークは拡大・充実し、志でつながる大切さを感じています。
ただ本日はあくまでも本校の中での地道なカリキュラム開発を報告します。

- 1月20日(金)・21日(土) 研究会をします！

全員の生徒による発表、とがった学校の校長によるセッション
充実した4つの分科会などがあります。

➡ 要項あります。
質問や参加希望などあれば酒井まで連絡してください。



スライド 3

自己紹介

酒井淳平 (さかいじゅんぺい)
立命館宇治中高 キャリア教育部長・研究主任

(略歴など) 京都市立の小・中→京都府立高校(北稜)→京都教育大→私学

1997年4月～1999年3月 京都食品衛生専門学校 非常勤講師
(小学校からつまずいた生徒たちに高校の単位として数学Iを教える)

1999年4月～2008年3月 立命館中学校・高等学校 教諭
(9年間ずっと担任、中1～中3、中1～高3)

2008年4月～現在 立命館宇治中学校・高等学校 教諭
(2008年～2013年3月 初代キャリア教育部長)

2013年度～2015年度 文科科学省 研究指定 責任者
「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究」(全国5校)

2018年度～2020年度 文科科学省指定(探究) 研究主任+高校学年主任
(研究開発学校、WWL指定)

2021年度 キャリア教育部長+研究主任

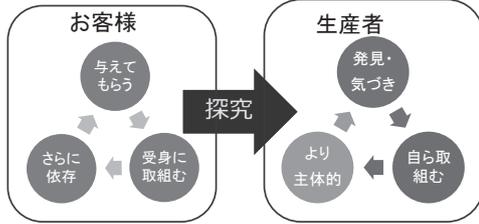
- ・科研費研究協力者
- ・キャリアコンサルタント(国家資格)
- ・啓林館、新編教科書著者
- ・文科省系の仕事(各種委員など)



スライド 4

本校の今の結論

なぜ探究なのか？

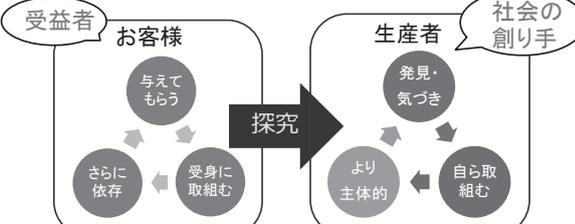


生徒を生産者に育てることが重要！
これは探究もキャリア教育もまったく同じ！
(教師が生産者であるかを問われている点も?)



スライド 5

これが今日のテーマの答えでは？



もしかしたら今の社会の風潮も、高校での教員の努力も、結果的に生徒をよりお客様にしているのかもしれない。



スライド 6

コア探究実施までの流れ

1994年度 学校法人立命館と合併
→学校大改革、先進的な取組多数

①2013年度 CSL(キャリア教育授業)開始
(文科省研究指定を受けての取り組み)
→生徒の成長+多くの学校に広がるという予想外の成果あり！

➡

②2017年1月 カリキュラム委員会スタート
(若手～中堅教員がチームとなって次の学校作りを考える)
→似たような問題意識！コアの必要性が共通認識になる！

➡

③2018年度 新カリキュラムスタート
(文科省の研究開発指定校として総合的な探究の時間のモデル作り)

探究だけをしたいのではない



スライド7

すべてに共通した課題がある！
(クラブや教科固有の課題ではない)

生徒

R
RITSUMEIKAN

教員：コアが教科を越えた教員の繋がり場
→教員集団の力量UP!!

スライド8

教員アンケートで確認

生徒の現状：従順だが口をあけて待っている

↓ 探究

お客さま

育てたい生徒像：
意欲（学ぶこと・人生そのもの）にあふれ、
自ら学び行動できる生徒

生産者

探究でお客様を生産者に！

R
RITSUMEIKAN

スライド9

カリキュラムを
デザインする

R
RITSUMEIKAN

スライド10

キャリアと探究
を柱にしたコア
の育成

IBにはコアがある！
日本版コアは総合で
可能では??

コア科目と各教科
との関係・イメージ図

2018年度から
実施!!

R
RITSUMEIKAN

スライド11

3年間で探究を6サイクル！
(当初作ったものでなく、実践して修正したもの)

マイテーマにこだわり、
大学につなぎたい！

探究1	• 問いを立てることから学ぶ意味の探究	1年生	<探究の基礎> ・大人の本気を題材にした探究 ・スキルの学習 ・学ぶ意味、働く意味 ・リフレクション
探究2	• 学びや経験を自分の未来とつなぐ		
探究3	• 自らが解決したい社会課題の設定	2年生	<課題（マイテーマ）の設定> ・チョコプロ×マイテーマ ・進路探究×マイテーマ ・好きなこと（論文）×マイテーマ
探究4	• 自分の探究テーマ・研究課題の設定		
探究5	• 自らのキャリアと結びつけた課題研究	3年生	<集大成・次のステージへ> ・マイプロジェクトの発信 （論文・プロジェクトなど） ・マイラーニングストーリー （リフレクション）
探究6	• 課題研究の発信やプロジェクト化		

R
RITSUMEIKAN

スライド12

どんな
授業??

R
RITSUMEIKAN

スライド 13

(高1・授業スライドから)

問いを立てる授業の大まかな流れ

～先生は毎回変わります！～

- ①担当の先生から今日の授業の質問作りの目標、教科を学ぶ意味について (1) (12分程度)
- ②先生の話に対して質問を作る (10分)
＜質問作り・前半＞
- ③質問にも答えながら担当の先生から教科を学ぶ意味について (2) (10分)
- ④先生の話に対して質問を作り、それに答えながら話をまとめる (13分)
＜質問作り・後半＞
- ⑤まとめ、今日の気づき記入 (5分)

情報収集 → 整理・分析 → まとめ → 課題設定

スライド 14

(2021年度) 高2 コア探究

STAGE 1: 興味関心→テーマ設定 (知識:論文の書き方)
 STAGE 2: 希望進路→テーマ設定 (知識:進路について)
 STAGE 3: プロジェクト→テーマ設定 (知識:プロジェクトのPDCA)

コンクールに出してみよう!
志望理由書も書きます!
プロジェクトを実行します!

ゴール! → 3つのSTAGEの学びを元に、高3で自分が取り組む研究課題を設定!

スライド 15

<コア3・1年間の予定>

卒業!

大学以降の学び方!

研究論文 (8000文字以上) or PJ+報告書 or ポスター or マイラーニングストーリー

発表

ポスター
マイラーニングストーリー
P.J等中間報告
論文版完成!
P.J等実行
研究論文 (3000字?)
P.J作り
アウトライン

いろいろな発信!

<必須!>
・1月末の発表
・P.J等は何らかの学外発信

4月 9月 1月 3月

スライド 16

高3コア探究

「マイ・ラーニングストーリー」作成

・高校の自分の成長をポスター (パワポ) で表現
・必ず入れる項目は以下の通り

- ①自分の成長の軌跡 (学年ごと)
- ②①から選ぶ自分の成長ベスト5
- ③残った課題=大学でつきたいカ ベスト3
- ④高校のエピソードや感想、写真などを適宜入れる
- ⑤大学での生活や将来への抱負 (こんなことを頑張る! こういう経験をする!)
- ⑥将来こんな人になる、こんな仕事につく
→⑥は自分manifestoを見ればベースがあります!

スライド 17

My Learning Story

3年7組140000

生徒の作品例

振り返ることで成長の実感と将来への目標を立てるように

キャリアパスポートになると思っています!

将来目指す職業: 将来目指す職業: 空手のグランドスタッフ

私が目指す将来像: 毎日楽しめて挑戦している

振り返ることで成長の実感と将来への目標を立てるように

キャリアパスポートになると思っています!

スライド 18

低身長でも140kmプロジェクトは成功するのか

3年7組140000

生徒の作品例

キャリアと結びつけたマイテーマ

この生徒は立命館大学のスポーツ健康科学部へ

身長と球速の関係

身長が高くない選手は、球速を上げるために、肩甲骨を鍛えて、より大きなエネルギーを生み出す

肩甲骨を鍛えてしなりを生み出す

肩甲骨の動き→胸筋の伸張、腕が振れる

胸筋の伸張→腕の外展→力が伝わる

肩甲骨を鍛えてしなりを生み出す

肩甲骨の動き→胸筋の伸張、腕が振れる

胸筋の伸張→腕の外展→力が伝わる

スライド19

生徒の作品例

マイテーマを起業プランに！
+報告書

Japan Challenge Gate 2022
経済産業大臣賞
受賞！！

**画期的な見守りデバイス
～Radiance Stick～**

概要

現状

課題・目標

今後の予定

まとめ

スライド20

生徒の変化は？

(本当は教員の変化が大きいうちに
思うのですが、)



スライド21

(2020年一斉休校期間) コロナ過で動いた生徒たち！

<生徒の行動例>

- * 自分で計画を立て、授業以外で毎日5時間勉強
- * 2か月で376時間と猛烈に勉強
- * 毎朝ランニングを20〜30分続けました。早寝早起きを続けられました。
- * 毎日夜まで母が仕事であるため、家事全般を自分が担当。少しでも夜まで仕事の母を楽にさせてあげられるように動いた
- * 美味しいラーメン作り企画。動物の骨や乾物、香味野菜などからスープを取り自分でタレも具材も作った。
- * 中高吹奏楽部の部員を募りテレワーク演奏実施
- * GCが募集したオンライン模擬裁判への参加。検察チームのリーダーとなり初めて人をまとめる経験
- * 京丹後の活性化プロジェクトに向けた、ミーティング主催の準備
- * ガウンを50着作り、病院に寄付。日常を崩さない。
- * ISN国際会議開催のための会議参加と準備

* 時間の使い方コンテストから(HPIにもあり)

スライド22

将来の見通しが無い生徒が激減！

入学時

高1・4月「将来の見通しがない」 (%)

高1・1月

高1・1月「将来の見通しがない」 (%)

コア探究実践開始

「将来の見通しが無い」
入学時48% (昨年度36%) → 1月27% (昨年度52%)



スライド23

コア探究の実施で キャリア教育は確実に前進した！

行動するべきことがわかって
いる生徒の割合

高3・卒業時の数字



スライド24

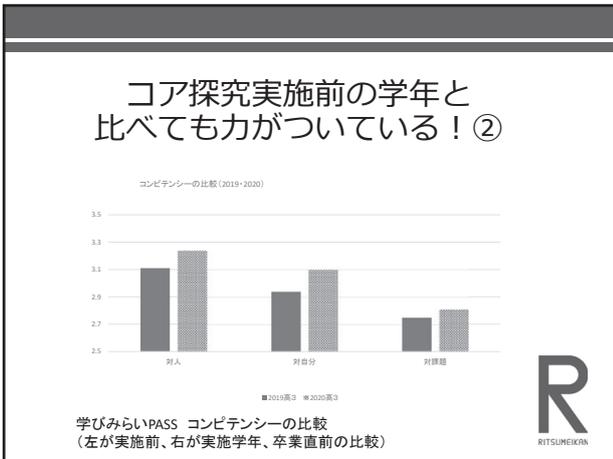
コア探究実施前の学年と 比べても力がついている！①

リテラシーの比較 (2019・2020)

学びみらいPASS リテラシーの比較
(左が実施前、右が実施学年、卒業直前の比較)



スライド 25



スライド 26

重要な成果 探究がつなぐ学びのストーリー

Aさん (女子・中学校から立命館宇治、内部進学希望、文系)

高1 現代社会「SDGsアイデア報告会とリフレクション」

グループごとに考えたアイデアを報告

スライド 27

Aさん作成のスライド(1枚目)

マイクロプラスチックのない海に

Aさん、Bさん

スライド 28

Aさん作成のスライド(ラスト)

提案

コラボさせた商品を

日本でブランド化されている資生堂で
physicians formulaの
技術を

を広める

京都の高校生からSDGsを広げる！

- ・これが売れると他の化粧品会社も環境にいいものを作らざるを得なくなる
- ・"高校生のアイデアから作られた"というキャッチコピーで同世代にSDGsを広められる

スライド 29

2年後 Aさんは3年生になりました

(探究テーマ)
「うじラボプロジェクト」

企業とコラボし、オーガニックなマスクスプレーを開発
→文化祭で限定販売

"高校生のアイデアから作られた"というキャッチコピーで同世代にSDGsを広めてるのは？

スライド 30

Aさんのプロジェクト報告書

「私は高校一年生の時の現代社会の課題で、オーガニックな会社とコラボして環境や人体に良い化粧品や日用品を作る」ということを考えましたが、その時は行動に移すことができませんでした。

しかし、今年(高3)のコア探究で、そのプロジェクトを進めることができました。一年生の時はただ頭に思い描いていただけのプロジェクトを実際に形にするということがすごく大きなモチベーションになりました。

総合的な探究の時間があることで、Aさんの課題意識はより具体的なアクションにつながる！！

スライド 31

各教科の学びも重要

「(プロジェクトを進めるにあたって) 現代社会の授業で詳しく調べていたため知識も多く、このプロジェクトの大きな力になれたと思います。また、私はSDGs(本校の学校設定科目)の授業で環境について学んでいるので、そこで学んだこともこのプロジェクトで生かすことができました」。

学びが将来につながる

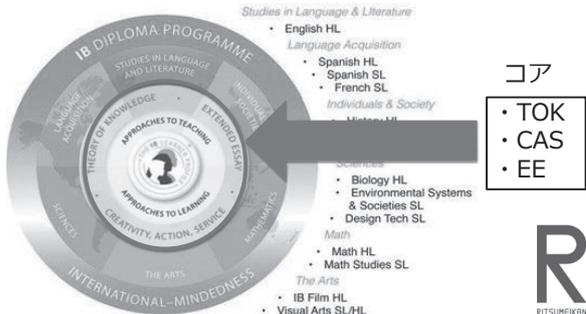
「私は大学で経営学を学ぶので、すぐくためになる経験をさせていただけたなと思います」

総合的な探究の時間は、学びをつなぎ、生徒の学びを豊かにする！(本校がようやく気づけたこと)



スライド 32

IB教育にはコアがある



コア

- TOK
- CAS
- EE



スライド 33

日本型コアを形にしたい！

(仮説)

- 1、コアは必要。
総合と特活が要
- 2、日本型コアはおそらくチーム
(IBコアは専門家が担当)




スライド 34

教員が教育の創り手であることが重要では？

教員の最も大事な仕事は何？ ➡ 生徒を育てる

<p><お客さまの例> ~してもら~</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教えてもらうことが当然と思う。 ・生徒が育つための方法を自分で考えようとしない。評論はできる。 ・与えられたことはできる。(自分からはしない) ・何のために取り組んでいるのかわかっていない。 	<p><生産者の例> ~何かをする~</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で学ぶのが当然と考える。 ・生徒が育つための方法を自分で考える。自分から学び、実践できる。 ・自分から取り組む。 ・取り組むことの意味を分かっている。 ・誰かのためになる価値を産み出す。
--	---

自分はお客さま？ 生産者？

生産者が教育の創り手。
(評論家は誰も育てることができない！)

